

リザーヴ・ブック・システムと指定図書制度  
American and Japanese Reserve-book Systems

澤 本 孝 久  
*Takahisa Sawamoto*

*Résumé*

College and university libraries in the United States commonly maintain reserve-book collections, consisting of books reserved for use by students to whom they have been assigned for reading in various courses. The idea of such collections was introduced to Japan and applied in a limited sense in 1928 when Tokyo Imperial University Library resumed functioning after its destruction in the great earthquake of 1923.

Since the 1966-67 academic year, when the Ministry of Education began to allocate funds to certain libraries of nationally supported universities for the development of *shiteitoshō* (reserve-book) collections, many articles describing such collections in specific libraries and discussing their merits and demerits have appeared in our professional journals.

In this paper, the writer first reviews the literature on the American reserve-book system, introducing the problems connected with it, and then reviews the literature on the *shiteitoshō* system, an adaption of the American system. Detailed information on the *shiteitoshō* in our schools shows that in almost all of them, despite the intent of the Ministry of Education that it be restricted to materials for "required" reading, it sets apart and reserves mainly books for "recommended" or "suggested" reading.

In Japan, where most courses in colleges and universities are taught through lectures alone or on the basis of single textbooks, it probably is premature to spend large amounts to provide undergraduate collections with multiple copies of "suggested" titles. The money could be used to much better advantage in building up basic materials relevant to the subjects being taught. The reserve-book system has meaning only in relation to teaching which needs it. For it to serve a useful function, there must be teaching in which reading outside the classroom is not merely suggested but required. Faculties must recognize that their teaching methods and needs should be the determining factors when they consider development of the *shiteitoshō* system.

(School of Library and Information Science)

I. は し が き

II. 米国のリザーヴ・ブック・システム

- A. 米国の大学図書館の学生に対するサービスの変革
- B. リザーヴ・ブック・システムの起原
- C. リザーヴ・ブック・システムの現状
- D. 問 題 点

III. わが国の指定図書制度

- A. 指定図書制度の歴史
- B. 指定図書制度の現状

IV. わが国における問題点と今後の課題

- A. 問 題 点
- B. 今後の課題

I. は し が き

1966～67年度から、文部省が国立大学の図書に対し指定図書予算を配分するようになって以来、指定図書問題に関する論議はとみに盛んになってきた。米国のリザーヴ・ブック・システムの翻訳であり、わが国へその制度の移植を試みたわけであるが、言葉を日本語に翻訳しても教育環境の異なるわが国の大学にこの制度を定着させるには多くの問題がよこたわっているように考えられる。

元来、大学は高等教育の実施および研究遂行とその成果の発表を2本の柱とし、それらを遂行するために、人類のかち得た知識を保存し、さらに学外一般に対しても新しい知識の普及をはかる等、昔から知的活動の中心として存在してきた。時代の要請に応じて若干の変化をしたことはあったにしても、大学の持つ研究教育という使命ないし機能は、抽象的に表現する限りでは、大きな変化はしていない。

しかるに、日本の大学においては、図書館は戦前はもちろんのこと、戦後新制大学に切り換えられ、民主主義教育が盛んに唱導されるようになって、研究図書館としての側面のみ重点がおかれ、学生のための教育、学習に役立つ図書館機能は等閑に付されてきた。正に Keyes D. Metcalf のいうように、“世界中の多くの大学の中で、学生こそは忘れられた人である。”<sup>1)</sup>

本稿において、初めに米国のリザーヴ・ブック・システムの理念、現状および問題点を主要な文献等によって鳥瞰し、さらに、わが国における指定図書制度の発達、現状を文献ならびに指定図書制度実施中の若干の国立大学図書館から得られたデータを基として検討する。

この指定図書制度はもともと教育に対する大学図書館サービスの一形態として考えられてきたものであるが、問題は図書館以前の問題を含み、教育方法の改革を前提としない指定図書制度はむしろ滑稽とすら思われる。その意味では大学教員の教育理念如何が今後真の指定図書制度の発展に大きな影響をもつものと考えられる。

II. 米国のリザーヴ・ブック・システム

A. 米国の大学図書館の学生に対するサービスの変革

20世紀の初めといっても、主として30年代にかけて、米国の大学(カレッジ)の図書館は著しい変革を示した。それは教員の教授方法の変革が学生の図書館利用に影響し、ひいては、図書館の学生へのサービスに変化を惹き起したのであった。このことを Guy R. Lyle は次のように記している。

“米国の大学図書館のサービスの様式も1875年頃までは比較的単純であった。図書館は大学における大事な象徴として抽象的に認められたが、たいていは言葉だけの尊敬であった。米国の大学図書館史の研究によると、たいていの大学図書館が学生にとって非常に不十分なものと思われたので、19世紀の中頃以降に設立された文芸協会は、その主な目的のひとつとして学生図書館の設立に乗り出したほどである……。20世紀になるまでは、しかも多くの大学では20世紀の20年代30年代になるまでは、図書の倉庫としての図書館の伝統的な役割にも、それらの図書の番人としてのライブラリアンの伝統的な役割にも、著しい変化は起こらなかった。”<sup>2)</sup>

“第一次世界大戦は大学のカリキュラム、特に史学、社会学、人文科学の分野に著しい変化を惹き起こした。新しい思考や事件や発見は、もはや一冊の教科書という制限内で説明することはできなくなった。最初に図書館への影響は、必読図書の本利用を非常に増大することになった。次にハーヴァード大学、スミス大学、スワースモア大学その他における優秀学生コース(honors course)、教養読書コース(general reading course)、個別指導制度(tutorial plan)、およびカリキュラムの改革により、今までと異なる図書館利用がなされるようになり、その結果、図書館の全蔵書の中からより多くの資料が授業を授けるのに役立つようになった。これらふた通りのカリキュラムの展開——史学、社会学の多くのコースで教科書の代りに図書館の資料を読むことを課すること、いわゆる優秀学生コースまたは類似の教授法の導入——は、図書館が授業を授けるのに重要な役割を荷うものであるという認識をもたせるのに、初めて真の突破口となった。この読むべきものを別置(reserve)する制度の適用は広く行なわれるようになり、以前は棚の上で埃をかぶっていた多くの図書が書庫から引き出されて盛んに利用されるようになった。優秀学生コースの図書館への影響はこれほど顕著ではない。というのはこの制度と関連して図書館利用を十分に行なっている大学はほんのわずかしかなからである。”<sup>3)</sup>

同じく Lyle は大学図書館の教育的機能について論じ、学生の大学図書館の利用には3つのレベルがあるとして、第1は“教科書レベル、”第2は“リザーヴ・ブック・レベル、”第3は“個別研究レベル”ないしは“個別図書館利用レベル”と名付けた。<sup>4)</sup>

彼が“教科書レベル”と称する段階では、図書館は学習室のようなものであって、そこでは学生が自己所有の教科書を読んでいる。20世紀の20年代ごろまでは最も多い図書館利用法で、意外とまだかなりの大学で見受けられる光景であるという。このレベルの図書館利用がなされる原因は、授業計画が講義と教科書による宿題と練習と頻繁な試験から成り立っていることにある。

第2の“リザーヴ・ブック・レベル”と言われるものになると、必要な図書は若干であることもあり、たくさんある図書であることもあるが、図書館はそれらをリザーヴ用の書架上に配置し、学生はそこから若干を選んで読むような仕組みになっている。必読といわれる資料はクラスの学生が同時に読めるように十分な複本が備えられ

る。多分この第2のレベルと第1のレベルと組合わされた図書館利用が米国で一番多いであろうと Lyle は想定している。

第3のレベルの図書館利用は、図書館よりもしばしばラボラトリーと結びついた教授法から招来したもので、例えば生物学とか化学の学生が実験に使っている動植物の成長過程とか、化学薬品の反応を観察していて、自分で問題を解くことを学ぶという教授法である。学生は教室で講義を受動的に聴くのではなく、自分自身の教育に能動的に関与するように誘導されるのであって、教員はただ指導したりあるいは相談にのるだけである。学生は図書館に来て、クラス討義のために必要な情報を選び、精密に区分し、組織化し、評価するのである。この場合その課題に関連のある情報を得るための経験を学生に与えるのみではなく、学生の判断力や批判的能力を鋭くすることもその目的である。<sup>5)</sup>

以上、Lyle により大学図書館の学部学生の図書館利用の3つのレベルを概観したが、リザーヴ・ブックを利用するのは第2のレベルの利用法で、少なくとも“ただ一冊の教科書による教授法”(single-textbook method)より進んだ教授法から生まれたものである。この単一の教科書に依る教授法によらない教授法というのは、一冊の教科書の他に副教科書を使用するのは意味が異なるのであって、同じトピックについて、異なる著者の違った意見を読んで、それらを総合判断し、学生自身が結論なり意見をもつというところに狙いがある。従って、例えば民主主義とか共産主義とかについて、できるだけ多くの著書、論文を読み、その中から長所短所を選り分け、正しい判断を下すに至る過程に教育的意義と効果が期待されるのであるが、現実はずしも予期した通りにはいかないことが多いのである。

#### B. リザーヴ・ブック・システムの起原

米国でリザーヴ・ブック・システムという制度は、そもそもいつ頃から始まったものであろうか。

特定の図書を授業との関連において学生に読ませようとする試みは非常に古くからあったもので、殊にクラスが小人数であった場合、教師個人の蔵書であれ、図書館の蔵書であれ、担当の教師の手を通じて利用するという方法は、ヨーロッパの大学では昔から行なっていたものと思われる。ヨーロッパから新帰朝の教師がそのような方法を講じた例もわが国の旧制の大学において戦前には見られた現象である。

米国においての歴史は、Lyle の云う19世紀の教育方

法の改革以前に遡ることができる。ハーヴァード・カレッジの記録によると、初めは有料貸出文庫とでもいうような形態をとっていたものであったが、後にリザーヴ・ブック制度に変っていったものとされている。1784年11月2日に開催されたハーヴァードの大学評議員会の記録によると、利用の多いある種の図書の利用に関し次のような規定が承認された。

（ドッドリッジ講義録ならびにヘブライ語文典の一学期間貸出料金について）

“ドッドリッジ博士の学部学生用講義録の1学期間貸出は1冊につき1シリング6ペンスとすべきこと。またヘブライ語文典は4ペンスとすべきこと。”<sup>60</sup>

しかし、これが“リザーヴ・ブック”と同様の理念に移り変わったことについて、ハーヴァード・カレッジの記録に興味のある記載が残っている。この記載について、Louis Shores は “しかし、図書館に影響を与えた最も重大な教育上の変化は、たぶん、神学の教授であった Edward Wigglesworth が1784年11月16日に大学当局に提出した提案であろう”<sup>61</sup>といい、さらに、“これはハーヴァード大学のカレッジ・ブック、8号、183-184頁に記載されているが、この提案は現代の米国式リザーヴ・ブック制度と比してなんら遜色のないもので、19世紀になって単一教科書による教育方法が修正されたが、それに先立つことほとんど100年も前であった”<sup>62</sup>と書いている。

Wigglesworth の提案は600語を越すかなり長文のものなので、その要点を述べると、同教授は神学の講義2科目と演習1科目の計3科目を担当していたが、神学のみならず、法学、理学、政治学などを専攻する学生にとってもこの講義は必修であった。同教授はただ講義を行ない若干の質問に答えるだけでは基督教の教義を説く牧師になろうとする者にとって十分ではないと考え、そこで、将来はこの2つの上級コースを履習する学生は、火曜日に行なう講義に出席すべきこと、その講義の内容は四角張らない自由討議とすること、そして、学生は教授が言及する著書の章・節を読んで、宿題として課せられた部分を前もって周到なる注意をはらって予習しておくべきことを提案したものであった。

“もしこの提案をご採択に相成り候節は、次週の講義の解明に役立つべき著書を毎週図書館に注文する権限を小生にお与え下されたく、また学生にも演習の準備のためこれらの著作を利用することをご許可相成りたくお願申し上げ候、”<sup>63</sup>と Wigglesworth 教授は提案の終りに記している。Wigglesworth 教授のこの提案がいつから

実現されたかは定かでない。また、これは制度として図書館が管理するか、教授が管理するかの相違はあっても、正にリザーヴ・ブックの理念である。しかし、このような、教授によって管理されたリザーヴ・ブックという考えかたは、ヨーロッパの大学の教育方法の中には、もっと古くからあったと推定されることはすでに述べた通りである。

リザーヴ・ブック・システムが図書館内のサブ・システムとして運用されたことの証しとなる最も古い記録は *Library Journal* 第3巻（1878年）にある“特別リザーヴ”と題する記事であろう。これはハーヴァード・カレッジの図書館におけるリザーヴの規則について書かれているので次に紹介しておく。

“特別リザーヴ——学期の間自分のクラスで言及しようと思う図書のリストを図書館に手渡すのはハーヴァードの教授連の習慣である。これらの図書は一般貸出図書から別置され、カバーをかけられ、色ラベルが本の背に貼られる。それからこれらの図書は、学生が自由にそこに行けるアルコーヴに配架される。ラベルにはリザーヴ・ブックと書いてある。

“この図書は教授の命により一般貸出図書からはずされ、その結果、この教授のクラスの学生がみんな公平にその本を利用することができるようになる。

“この本は開館時間中は部屋から持ち出してはならないし、利用が終わったらものと棚に返さなければならぬ。

“閉館している間、しかるべき手続きをすればこの本を借り出すことができる。しかし次の開館日の午前8時までに返却しなければならない。

“他の図書館でも、特別に関心を持たれるような図書、従って大勢の人が読みたがるような図書に対して、この方法を適用するのもしよいかもかもしれない。最初の人があるいはその人はこの図書に一番関心が無いかもかもしれないのに、皆が読みたがっているこの本を見る唯一の人になってしまうようなことが、どこの図書館でも起こるものである。”<sup>64</sup>

その少し後になって、“貸出制限つき参考書” (Restricted Reference Book) という題の下に書かれた一文が *Library Notes* の第3巻（1887年）にみられる。開架式にした3,000冊の図書といっしょに置かれたリザーヴ・ブックが隠されたりするので、“貸出デスクの後にこれらの図書を置き、請求に応じて貸出すという普通のやり方に戻った”というのが“貸出制限つき参考書”の意味である。そして貸出手続の時間の無駄を少なくするた

めに 7.5×25 cm という長い請求票を作ったことが書いてある。<sup>10)</sup>

ちなみにこの文章は無署名であるが, hav (=have), wer (=were), sum (=some) など特異な用字をしているので, Melvil Dewey の書いた文章と想像される。

このほかに, リザーヴ・ブックの起原について Metcalf は, "この種のサービスはハーヴァードにおいて1870年代に端を発するもので, 当時同大学で教えていた Henry Adams の努力に主としてよるものである"<sup>11)</sup> と記している。

### C. リザーヴ・ブック・システムの現状

さて, このように古い歴史を持つ米国のリザーヴ・ブック・システムは現代においてどのように実際に行なわれているのであろうか。初めにことわっておかなければならないことは, 教員から学生に図書を読むことを課する場合, ふた通りの課し方があるということである。その1は必読 (required reading) であり, その2は副次的 (collateral または supplemental) とか, 読むことを薦められた (recommended または suggested) という程度のものである。その第1の必読というのには2種類あって, 1つはある図書の全体またはその一部 (章・節) をある期間内 (たいていは1週間, とくに2週間, 場合によりその学期中) に読むことを要求されるものである。いま1つの必読は読むべき図書のリストが学生に与えられ, そのリストに載っている図書の中から, 合計が少くとも一定の冊数 (たとえば10冊) とか, 一定のページ数 (たとえば2,000 ページ) になるよう自由に選んで, 一定の期間内 (多くはその学期中) に読みおわることを要求されるものである。副次的な, あるいは読むとよいという示唆を与えられたものは, 必読ではないが, あるトピックに関して重要な参考文献のリストを構成しているような場合もあり, そのトピックについてレポート (term paper) を要求された場合には, かなり "読むべきもの" が入っていることになる。

このようにして学生に課されるものは, 必ずしも図書とは限らず, 雑誌論文もあり, 美学や音楽の場合などには視聴覚資料が課されるようになってきた。

これらの図書その他の資料を課題とし読むことを教員が要求し, 次の週にそれを基にして討論を行ったり, テストをしたりする。そのために, 学生は教室で教師がこれらの題名を告げると, 図書館に殺到し, 先を競って借覧しようとする。この需要の多い資料を一般の図書と区別し別扱いにすることがリザーヴという言葉の始まり

なのである。

このように特別需要の多いリザーヴ・ブックの利用をコントロールするために, 一般図書が閉架式であれ開架式であれ, それとは別置して運用するようになった。その方法には基本的に3通りの方法があると Lansberg はいう。すなわち (1) 閉架式。すべてのリザーヴ・ブックをカウンターの後に置き, 学生の要求によって貸出すやり方で, この際, リザーヴ・ブックはリザーヴ・ブック室内か館内でのみ使用する。多くは1回2時間以内で, オーバーナイトの利用以外は館外に貸出さないのが多いが, 図書館によって館外に短期間貸出す制度を特定の (余り需要の多くない) リザーヴ・ブックに対して行なっていることもある。(2) 開架式。すべてのリザーヴ・ブックをリザーヴ室に開架している方法である。この室内または館内で利用でき, 館外貸出はオーバーナイトである。館によっては, そしてものによっては短期の館外貸出しを認めるところもある。(3) 併用式。利用の多いリザーヴのみ閉架にし, その他はすべてリザーヴ・ブック・ルームに開架式に配置する方法で, (1) と (2) の長所をとったものといえよう。この方式が Lansberg の調査でも一番多かったという。<sup>12)</sup> 開架式あるいは併用式の開架部分はリザーヴ室に開架するのが普通であるが, 開架式の一般図書と混架する方式もある。この場合貸出カードの色が異なるのみでなく, 色帯とか特別のラベルによって一般図書と容易に識別しうるような手段がとられる。

現在, 米国の大学で学部学生のためにリザーヴ・ブックの制度を設けてない図書館はないであろう。それほどまでに普及したこの制度にも不満な点があることは, 学生側からも, 教員側からも, 図書館側からも指摘されている。かつて Harvie Branscomb はその不満の原因として次のことを挙げている。

1. リザーヴ・ブックを利用しうる時間が短い。
2. たくさんの複本が必要になる。
3. 読むべき図書リストが変更されたとき無駄が起こる。
4. 利用されもしないたくさんの図書が拘束を受ける。
5. リザーヴ・ブック・ルームが混雑して喧噪である。
6. 学生がリザーヴ・ブック以上その先へは進まない傾向がある。<sup>13)</sup>

たしかに大勢の学生が一度に同じ図書を読まなければならないとすれば, 多くの複本が必要となるし, 利用す

る時間も制限される。果してどれだけの複本を必要とするのか。また学生はどれほど利用し、あるいは利用しないのか。

リザーヴしておく資料は十分な数の複本を用意しておかなければならないとされているが、この際の十分な複本の数とは一体どれだけのものであろうか。

この点に関しては、他の大学における実際の経験に照らして一定の割合、例えば学生10人につき1冊とか8人につき1冊というように定めている場合と、複本決定に必要な基礎的データを算出しこれを基にして算定する場合が考えられる。

たとえば、Lansberg の調査報告はニューイングランド地方の27のカレッジとそれと比較のため他の5つのカレッジのリザーヴ・ルームを調査したものであるが、その中で複本数はクラスの学生数、課題の期間の長さおよび目的、読むのに許されている時間などによって異なる。盛んに利用される参考書の場合、14館中6図書館が学生10人に1冊の割で、4館は6ないし8人につき1冊、その他に5人に1冊、5ないし10名に1冊、8人につき1冊、8ないし10人に1冊というのが各1館づつあったと報告している。またイェール大学ではすべて2冊までで、それ以上は学科が提供するというのもあった。<sup>14)</sup>

この他、需要の大きい必読図書は8人とか10人に1冊の割合で備えるが、副次的な、いい換えれば教員が学生に読むことを薦める図書の場合は15人につき1冊、あるいはそれ以下に加減している場合もよく見聞するところである。このような他の類似図書館の方針を参考にし、自己の多年の経験を加味して複本数の決定をするのが、最も多く用いられている方法であろう。

複本数を基礎的データによって決定しようという Margie M. Helm の研究は、数少ないこの種の報告の中で興味のある論文であるから少し詳しく紹介する。

Helm は初め種々の要素を考えたが、調査の結果重要でないと考えられたものは消去していき、結局次のデータを複本数決定に必要なものとして挙げている。

#### I. 定数的データ

(a) 平均的學生が1時間当り読み得るページ数

#### II. 大学ごとに特定のデータ

(a) 1回の貸出閲覧時間の平均

(b) 1日当りまたは1週間当りのリザーヴ・ブックの平均貸出閲覧冊数

#### III. 同じ学内でもクラスごとに異なる変数

(a) そのクラスの学生数

(b) ある期間に読まれるべきページ数

(c) 読了するまでに許された期間

(d) 読むべき図書のタイトル数と課題の種類

次にこれらのうち若干について説明を加えておこう。

#### 1 時間当り學生の読むページ数の平均

1時間当り學生が読み得るページ数というものは複本決定の1つの要素であるが、米国教育協会の研究副主任 Ivan A. Booker がシカゴ大学の一年生について1930年、1931年に行なったテストでは、平均一秒につきそれぞれ3.68語、3.83語であり、ウェスタン・メリランド大学の一年生に1931年に行なったテストでも同様な結果であったことから、一般的に新入生の平均は1秒間3.50~4.00語であろうと思われた。これは小説書のようなものでなく文体、語彙、内容の難易について典型的なテキストブックのような図書を用いてテストした結果である。

ミシガン大学教授 Howard Y. McClusky が小説と倫理学の分野で行なった実験では、遅いものと正常のものと早いものとの中間値が記録されているが、正常なものの平均は1秒当り3.51語であったという。

以上の結果から、McClusky の出した低いほうの値を Helm は採用することにした。

またシカゴ大学出版社の Dorothy R. Swift によると、テキストブックは10ポイントの活字を使用したもので1ページ平均400~450語、8ポイントの活字を使用したもので1ページ平均500~525語であるということから、1ページ平均450語とし、その結果、平均して學生の1時間当り読み得るページ数は28ページであると算定した。

#### 1 回の貸出閲覧時間の平均

シカゴ大学、ミネソタ大学、シンプソン大学で調査した結果から、それぞれ平均で68分、60分ないし70分、56分が得られたので、Helm はリザーヴ・ブック1回分の貸出閲覧の時間は平均1時間くらいと算定した。もっともウェスタン・ケンタッキー州立大学では館内閲覧利用は1回1時間という制限がつけられているが、この1回の平均は37分というデータもある。

#### 1 日または1週間の平均閲覧回数

シカゴ大学では1日の平均が2.93回、1週間当り14.65回、ウェスタン・ケンタッキー州立大学においては1日当り3.11回、1週間の平均は18.66個という結果を得た。すなわち、1日平均はどちらもほぼ3回であったが、週平均に少し開きがあるのは、シカゴ大学では金曜日の午後5時から週末の館外貸出が許され、ウェスタン・ケン

タッキーでは土曜日の午後3時15分になって週末の館外貸出が認められるという相違によるものと考えられた。

Helm は上記のデータあるいは要素というべきものの間には次のような関係があると見做した。

クラス学生数を  $a$ ,

読まれるべきページ数を  $b$ ,

平均的學生が1時間当り読むページ数を  $c$ ,

1回の貸出閲覧時間平均を  $k_1$ ,

ある期間内に期待される貸出数を  $k_2$  とすると,

クラスの學生が読むべきページ数の合計  $= a \times b$ ,

平均的學生が1回の貸出閲覧時間中に読むページ数

$$= c \times k_1,$$

クラスのすべての學生に対し必要な貸出閲覧回数

$$= \frac{a \times b}{c \times k_1}$$

必要とされる図書の種類または複本数を  $x$  とすると,

$$x = \frac{a \times b}{c \times k_1 \times k_2}$$

この場合  $x$  は複本数の場合のみでなく、場合によってはタイトルの異なる図書の数を表す場合にも用いられる。もし、課題が特定の1冊の図書ならば複本数を意味し、もし数種の図書が挙げられていて、そのうち1冊を読めばよい場合には、タイトル数あるいは複本数の合計を意味することになる。

Helm はウエスタン・ケンタッキー州立大学学芸学部を例として  $a$  (クラスの學生) = 50人,  $b$  (1週間ごとに読むべき量) = 50 ページ,  $c$  (1時間当り読む量) = 28 ページ,  $k_1$  (貸出閲覧時間平均) = 0.62 時間 (= 37分),  $k_2$  (週当り貸出閲覧回数平均) = 19回として計算したところ

$$x = \frac{a \times b}{c \times k_1 \times k_2} = \frac{50 \times 50}{28 \times 0.62 \times 19} = 7.6$$

すなわち、8部の複本を必要とするという結果を得た。

また別の例として、1クラス 80 人の學生が1学期間(有効な週数を16週として計算している)に何冊かの異なる本を合計 3,000 ページ読む課題を与えられた場合

$a=80$  人

$b=3,000$  ページ

$c=28$  ページ

$k_1=1$  時間

$k_2=19$  回  $\times 16$  週 = 304 回

$$\therefore x = \frac{80 \times 3,000}{28 \times 1 \times 304} = 28.1$$

この結果から28冊の本が必要ということであるから、もし読むべき本として21タイトルがリストされていたとすれば、そのうち7タイトルを2部ずつ備えるとか、その他の方法を講じて合計28冊になるようにすることになるとしている。<sup>15)</sup>

しかし、この一見理論的のように見える複本数算出の公式は必ずしも正確な値を算出することにならない。それはもし期間が長期にわたる場合には學生は期末に集中して借りようとする傾向があるとか、必読図書の場合でも必ずしもすべての學生がその本を読むとは限らない。ある者は自分で購入したり、ある者は別の図書館から入手したり、ある者は友人が館外に借り出した機会にまた借りをする。そして怠けて読まないものも相当数にのぼるからである。

リザーヴ・ブックの複本経費を最少限に止めるための研究が最近フロリダ州立大学で閉架式リザーヴ・ブックのデータを基にして行なわれた。この研究によると、米国の全大学の蔵書はおよそ2億1千5百万冊に及び、リザーヴの蔵書はその1%強で少いといっても相当な金額の経済問題である。しかも普通図書の経費という図書費とその図書を配架するまでの費用を主とするが、この他に學生が待たされ教育効果が失われることの費用等も考慮に入れ、待合せの理論を用いて費用決定のモデルを考案した。これはまだ予備的研究であるが、學生の時間はリザーヴにおいて最も重要な経費であり、この複本決定のモデルは必読の要求の高いリーディングの場合一般に適切な結果が得られるし、経費の最少化は適当な費用見積りと適切な変数を選ぶことによって決められるだろうと結論している。<sup>16)</sup>

Branscomb は Waples, McDiamid, Johnson, Eurich, Parker らの調査に、自分の調査結果を加えて学部學生の利用調査を総合的にまとめた。それによると合計51のカレッジについて調査をまとめたことになるが、その結果は驚くべき程一致していた。それは学部學生は平均で年間12冊、1学期6冊ほど大学図書館の一般蔵書から借り出しており、リザーヴ・ブックのコレクションから年間で平均50乃至60回、タイトル数にしておよそ半分位の貸出を受けていることになる。とすれば1科目につき1学期毎に3種位の図書を借りて読んでいることになる計算である。これは平均のことであるが、さらに Brans-

comb は彼が調査した中西部のある大学について子細に分析した。それによると、同大学の学部学生 2,292 人のうち、42%に当たる 959 人は全然図書館から借出しをせず、9 週間の調査で 1 冊またはゼロのものを合計すると 53.8%の 1,291 人も居ることが判明した。残りの 46.2%, すなわち 1,001 人が 95% にあたる 6,252 冊の本の貸出を受けていたのであった。リザーヴ・ブックについてみても、程度は違うが同じような傾向がみられ、全然利用しないもの 435 人 (18.9%), 9 週間に利用冊数が 0, 1, または 2 冊という学生の総数は 677 人 (29.5%) もあった。両方を合わせて計算すると、図書館の資料を全然借出さない学生が 293 人 (12.7%) おり、2 冊またはそれ以下の学生は 511 人 (22.3%) もあった。この調査によると一般蔵書から借出された図書は 6,584 冊であったが、リザーヴからの貸出しは 26,986 回で 4 倍以上に達していた。以上のことから判ることは、米国の大学の学部学生の図書館資料借出しの大多数はリザーヴ・ブックであり、かなりの学生が全然貸出しを受けず、1 か月当たり 1 冊かそれ以下の者は過半数に達する状態である。<sup>17)</sup>

これは図書館個々のリザーヴ・ブックの利用調査の結果を見ても明らかであって、例えば、オレゴン州立カレッジで 1937 年秋学期、48% のリザーヴ・ブックが利用されず、プリンストン大学で 1934 年春学期、4,224 冊のうち 47.4% は 8 回以下の利用であった (1 学期内に 2 週間貸出期間のものが 9 回利用できる勘定であるから、これではリザーヴする意味がない); ネブラスカ大学では 6,181 冊がリザーヴされ、うち 4,594 冊 (74%) は 9 回以下、1,169 タイトルは全然利用されなかった、という記録がある。<sup>18)</sup>

比較的近年の調査では、コルビイ大学で 9 回以下の利用は約 33.3%, 全然利用しないもの 10%; メイン大学の場合、タイトルで数えて 9 回以下のもの約 21%, 全然利用されぬもの約 10%; ミドルバリー大学では 9 回以下 25%, うち 5% は全然利用されず; オバーリン大学で 9 回以下は 50%, 全然利用せず 10%; クイーンズ大学 9 回以下 5%, 全然利用せず 5% という結果であった。<sup>19)</sup>

しかし、以上のような事実があるにもかかわらず、リザーヴ・ブックのコレクションは、学生数の増大につれ、学部学科の分化に伴いますます増加する傾向にある。

1947~48 年に行なわれた Lansberg の調査においても、学生数 1,200 人程度のアマースト大学やマウントホリオーク大学のリザーヴ・ブック室の冊数のように 1 万を越えている例もみられた。<sup>20)</sup>

最近 20 年間に目覚ましい発達を遂げた学部学生用図書館ではリザーヴ・ブックはどのようにあつかわれているかをやや詳細に検討してみよう。

#### ハーヴァード大学ラモント図書館<sup>21)</sup>

1948 年に開館した米国で最初にできた学部学生用図書館であることは周知の事実である。この図書館では最初は必読書のみをリザーヴとし、副次的な読み物は一般図書の一部とする方針であった。リザーヴ・ブックとして購入された図書はいつまでもリザーヴ・ブックとして取扱われ、リザーヴ・リストから除外された場合には、閉架リザーヴから開架リザーヴに移される。その際、もし多くの複本があれば、2~3 部のみ開架リザーヴに配し、余部は地下の倉庫にしまわれる。開架リザーヴにおいては、主題別一括した後著者名順に配列する。複本数は厳密な方針はないが、一般的に 10 人に 1 冊という割で、40 冊または 50 冊を最大限としている。

1949 年の夏、すべてのリザーヴ・ブックを開架リザーヴとし、需要の甚しく大きい図書のみを開架から閉架式に移すことになった。需要の大きい図書は 2 冊だけ閉架にし、他は開架に残す方針であったが、開架にした図書が見当らず学生の要求に応じられないようなことが起こったので、すべて必読とされる図書は閉架にすることになった。

1962 年に閉架リザーヴ 1,250 冊、開架リザーヴ 10,475 冊、1963 年には閉架 13,045 冊、開架 9,246 冊、タイトル数でいうと、およそ 2,500~3,000 種と考えられる。

リザーヴの貸出閲覧は 1948~49 年の 51,117 冊を最低として、1954~55 年に 312,766 冊の最高に達し、その後は 24 万冊から 30 万冊の間を保っている。

#### ミシガン大学学部学生図書館<sup>22)</sup>

多くの学部学生を擁する州立大学の学部学生図書館の先鞭をつけたもので 1957 年に新設されたものであるが、初年度 538 種、1,268 冊のリザーヴ・ブックをもって始め、次年度には 1,157 種、2,368 冊を新規購入した。1962~63 年度には最高 3,612 種 11,781 冊を新規購入している。その後は毎年 3,000 近いタイトル数で、7~8,000 冊くらいをリザーヴ・ブックとして新規購入している。閉架式にしているリザーヴ・ブックは 1958~59 年度で 2,504 冊であったが、1961~62 年度には 3,627 冊に達し、1964~65 年度には 2,815 冊に下っており、閉架式だけでも貸出閲覧は 1964~65 年で 58,184 冊に達している。開架式も含めると 1964~65 年度の全体のリザーヴ・ブックは 12,952 タイトル、34,079 冊になっている。



複本については、初年度は必読書は学生15人につき1冊の割合で購入し、副次的読み物の場合は1冊だけ購入することになっていたが、小人数のクラスで1部では不十分な場合があり10人に1冊の割合に改めた。さらにその後、学生数の多いコースに対しては7人につき1冊、学生数の比較的少ないコースに対しては10人につき1冊、もし図書館に25部またはそれ以上ある場合には14人に1冊の割合で、50部またはそれ以上保有している場合には購入しないというようになった。

初めは2〜3年リザーヴ・ブックを購入しつづければ、基本的な参考書が揃うので新規購入は少なくなると考えていたが、事実は予想に反し、ますます増加する傾向である。リザーヴ・ブックが紛失し再購入する場合は13%ほどである。またリザーヴの要求の多いのは社会科学系の学科で、中でも心理学と社会学が最も多くの複本を要求し、経済学、政治学もリザーヴの資料を盛んに利用させる。

この閉架式リザーヴの図書冊数は2,000代で、1階の貸出係のデスクの後に置かれているが、その他のリザーヴ・ブックはすべてリザーヴのマークをつけて開架式の通常の位置に配架されている。この開架リザーヴ・システムは教育的な効果があるのみでなく、閉架式にすることによる職員の貸出事務の過重負担を防ぐと考えられた。しかし開架されていると少数の学生がリザーヴ・ブックを独占したり、リザーヴ・ブックを盗んだりすることが起ったので1週間貸出すことと、一方では少数の閉架式を採用することも並行して行なっている。新しい問題となっている点として、雑誌論文でリザーヴの要求を受けるものが増加していることが挙げられる。許可を得なければ多数の複製を作ることができないため、その記事を含む雑誌の特定号を多数購入するか、あるいは複製許可を得なければならないからである。

#### サウス・カロライナ大学学部学生図書館<sup>23)</sup>

この学部学生用図書館の基本構想はハーヴァード大学のラモント図書館に類似している。この図書館が1959年に竣工したとき、全蔵書は150,000冊足らずからスタートし、1964〜65年で360,000冊余であった。最初リザーヴ・ブックの90%は本館から借用したものであったが、その後入手し得るものは購入して逐次本館に返し、現在本館図書で借用中のものは3%に下っている。一般的にいて、学生8人に対し1冊の割合で複本を用意することになっているが、40人を越すクラスに対しては、段々に割合を下げている。またリザーヴを要求されたものは

最小限2部は購入することになっているし、特別の場合以外は最大限でも20部を越さないことにしている。新入生に必修とされる2〜3の大クラスの場合のみ50部まで購入することがある。2回の蔵書点検の結果では、紛失図書は1%以下であったし、5年間の合計でも1,047冊に過ぎなかった。

この閉架式リザーヴ・ブックは3,000冊ほどで貸出閲覧は、1週間、3日間、2日間、1晩、館内閲覧となっている。リザーヴに関する限り、大学院生も学部学生も一括してこの学部学生用図書館で扱っている。

この図書館では教員と連携を密接にとり、閉架のリザーヴを最小限におさえる努力をしているので、開架された他の全コレクションはある意味で開架式のリザーヴ・ブックであるとも考えられる。

閉架式リザーヴ図書の利用は、館の内外利用を合せて、1959〜60年度で14,216回、1964〜65年度で28,929回、いずれも全貸出回数の約半数に達している。

#### インディアナ大学学部学生図書館<sup>24)</sup>

1950年代の末に、学生会館の1部を改造し学部学生図書館として使用するという方針が決定され、改造開館したのは1962年の初めであった。この図書館では開架、閉架両用のリザーヴがあり、開架方式のものは地階閲覧室に置かれているが、1965年度には約1,000冊であった。開架式のリザーヴはこの室内で読むことを薦められている(suggested)ものであるのにひきかえ、閉架式のもの必読書で、これは約2,000冊あって、そのうち1,500冊は恒久的にリザーヴ図書となっている。リザーヴ・ブックの利用は1962〜63年度に54,988回、1963〜64年度60,862回、1964〜65年度に87,375回というように、段々増加傾向を示している。

#### コーネル大学ユリス図書館<sup>25)</sup>

多くの大学で新しい学部学生図書館が新設される傾向がある中で、コーネル大学では新しい研究用の本館を建て、旧本館を学部学生図書館とした。改装が終って開館したのは1962年の9月であった。

このリザーヴは1962年秋学期には7,500冊ほどあったが翌年の春6,500冊に減っている。1964年の春は4,500冊が閉架、4,460冊が開架、計8,960冊がリザーヴであった。1965年の春には5,293冊が閉架、3,136冊が開架で合計8,429冊がリザーヴされた。1965年の秋には、閉架約6,000冊、開架3,000冊、計約9,000冊がリザーヴであった。リザーヴ・ブックの所属は、1964年には自館の図書は4,451冊だけで、このほか4,075冊をオーリン

本館から、344冊はその他の図書館から借りてきた状態であった。しかし、1965年になると自館所有のリザーヴ・ブックは5,921冊に増加し、これに本館から1,964冊、その他図書館から544冊を借りている。図書費の約3分の1に当る1万ドルをリザーヴ・ブック購入に当てているが、それでもリザーヴブックを全部自館で揃えることは予算不足でできないので、学内の他図書館から借用している状態であった。

リザーヴ・ブックは、特別の場合以外は学生10人につき1冊の割合で十分とされ、副次的な読みもの場合は15人につき1冊という割合で購入するのがここでは基準とされているが、リザーヴ系のライブラリアンが適当に調整する権限をもっている。ここでも必読書は閉架式とし、副次的あるいは読むことを薦められている図書は開架式としている。

閉架のリザーヴ・ブックはそこで2時間単位の閲覧を許されるのであるが、開架されているリザーヴ図書は色つきの帯で区別されていて、1日、2日、3日の館外貸出が認められる。

リザーヴ・ブックの貸出閲覧は、1962～63年度に閉架（館内、オーヴァナイトを合せて）130,191回、開架24,289回、計144,480回、1963～64年度には閉架117,583回、開架35,683回、計153,266回、1964～65年度は閉架138,450回、開架31,925回、計170,375回と増加している。

#### テキサス大学アカデミック・センター<sup>26)</sup>

テキサス大学の学部学生用の図書館は、1958年、当時副学長であった Harry H. Ranson 博士の企画になるもので Academic Center と呼ばれる地階1階地上4階の建物で、学部学生図書館としての機能はこのうちほぼ3階分を占める。他はテキサス大学の特別資料を収蔵したりするのに使われている。1963年9月に竣工開館したが、この設計はかなりミシガン大学の学部図書館に類似した点がある。

リザーヴ・ブックは学部学生のみならず大学院生に対するものもこのリザーヴ・ブック係で一括して扱う。このリザーヴ・ブックは約1万冊足らずでリザーヴに対する基本的方針は閉架式である。閉架リザーヴは2時間単位の館内閲覧かオーヴァナイトの貸出しが許される。この他に3日間館外貸出のできるリザーヴがあるが、これは開架された一般図書と混架されている。1964～65年度に閉架リザーヴの図書を若干、一般開架書架へ移し、館内でのみ自由に利用させる方法をとっている。

1963～64年度のリザーヴ・ブックは9,507冊（うち閉

架6,184冊、開架3,323冊）あり、1964～65年度には7,371冊（うち閉架5,021冊、開架2,350冊）と減っている。紛失した図書は1964～65年度に31種のリザーヴ・ブックが紛失しただけであった。

リザーヴの利用の多いのは、政治学、歴史学、社会学、心理学など社会科学系の学科で、英語英文学系はリザーヴを要求する図書数が一番多い。リザーヴ・ブックの閲覧貸出数は1963～64年度に70,824回、1964～65年度に97,186回と増加している。

#### D. 問題点

この米国で発達したリザーヴ・ブック・システムに関し、図書館人も、学生も、教員も不満足な点を持っていると Branscomb が指摘したことはすでに述べた通りである。

Branscomb は大勢の学生が要求する図書の問題の解決には、現在のリザーヴ・システムによらない他のもっと効果的な方法が考えられるべきであるとして、必要不可欠な図書を現在よりもっと多く買うことを学生に要求したほうが、大部分の学生にとって多分親切であろうし、確かに教育上の効果も上るであろう。比較的廉価なペーパー・バックの本を利用したり、よく計画を練った上での有料貸本を利用することは、この問題を解決する方法として紹介されている<sup>27)</sup> といっている。

現在は Branscomb の時代に比べると大学生の参考書として耐えうる名著が安価なペーパーバックとしてはるかに多く出版されている。しかし、有料貸本制度を恒久的制度として図書館が引きうけることには多くの反対もある。<sup>28)</sup> リザーヴ図書の変更がしばしば行なわれるような場合にはこの制度は財政上の危機をもたらしことも予測される。

最近ではリザーヴとして、雑誌論文が利用される傾向がますます多くなっているが、この種論文の複製の問題を論じたものは公共図書館の立場からの例はあっても、<sup>29)</sup> 大学図書館の場合については、わずかにミシガン大学学部学生図書館の場合に若干の記述がみられるのみである。この問題は著作権の問題がからむ非常に複雑な問題であるため文献に現われないのかもしれない。

最大の問題点は教員のリザーヴ・ブックについての考え方であろう。読むことを課されたはずの図書のうち非常に多くのものが、全然あるいはごく少数回しか読まれないままでリザーヴの書架に埃をかぶっている例証はすでに Lansberg や Branscomb らの調査結果としてあげた通りである。図書館で閲覧または貸出されていない

ということから、ただちに学生が読んでいないという結論にはならないとしても、非常に多くのリザーヴ・ブックが読まれずに放置され、比較的少数の学生のみが頻繁に読書をしているという事実は覆いようもない。この問題の解決は教員が真に必ず読むべきものを必読として課しているかどうか、また課題を与えた後でその追求を実際に行なっているかどうか、ということに懸っている。

図書館側からのリザーヴに関する問題点の調査は数多いが、教員側あるいは教授方法に関連して調査や探求は少ない。

学生側に立ってのリザーヴ・ブックの問題を論じた研究も少ない。しかし、図書館利用者としての学生がもし宿題の読みものを図書館ですぐ入手し得なかった場合はどのような反応を起こすであろうかという点について、Burnett のダーハム大学図書館でのアンケートによる調査は示唆を与える。“すぐ入手できることが肝心なのであって、したがって、遅滞は入手できなかったのと等しい。”<sup>31)</sup>これに関連して、前に説明した Hubbard 等のフロリダ州立大学における最近の研究は学生の待つ時間によって失われる経費を査定している点でユニークである。

同じくフロリダ州立大学で最近行なわれた、閉架式のリザーヴ・ブック・システムにおける図書館学専攻の15人のクラスを対象とした調査は学生の待ち時間による便・不便を考察したものとして興味深いものである。これら15人の学生は週3回(月・水・金)の授業があるクラスでリーディングの宿題を12与えられ、2週間内に読むことになった。すなわち、各授業の度に、リーディング2つが課され、次回までに読んでくるという条件であった。12のリーディングは読む時間の平均は最短19分最長54分で全体の平均では35分であった。コピーは1部ないし3部用意されたが、多くは1部または2部の場合に若干のものが借用するのに待たされて不便であったと訴えた。<sup>32)</sup>

Theodore W. Koch のリザーヴ・ブック・システムに関するシンポジウムと題する論文には、ニューヨークカレッジ、ブラウン大学、ダートマス・カレッジ、プリンストン大学、ペンシルヴァニア大学、ローチェスタ大学、ミシガン大学、イリノイ大学、ウィスコンシン大学、ネブラスカ大学、アイオワ大学、ミネソタ大学、テキサス大学、パークレイおよびロスアンゼルス両カリフォルニア大学、スタンフォード大学、サザン・カリフォルニア大学、ワシントン大学等におけるリザーヴ・ブック

に関する報告が集録してあるが、それぞれが問題点を報告している。<sup>33)</sup>

A. F. Kuhlman はリザーヴ・ブックのコレクションが効果的に利用されるために必要な条件として、12の綱目を挙げているが、そのほとんどが教員に対する注文であることは特筆する価値がある。<sup>34)</sup>

米国のリザーヴ・ブック・システムに対して外国人からの批判がないわけではない。

カーネギー財団の招聘により1936年米国図書館界を視察した Wilhelm Munthe は *American Librarianship From European Angle* の中で次のように述べている。

#### “開架されざる必読図書”

ここで議論的となるのは、この読書方式の大学図書館に対する影響如何ということである。しかも、それは決して無視できないほどの影響を与えている。図書館の全貸出数の90%以上が必読図書であるとは、ヨーロッパの図書館人が考える限りでは、不可思議なことである。この必読図書というのは、次の授業までに学生は図書館に行って、ある特定の本の特定の章節の内容を読んで、できればそれについてノートをとってしまわねばならないというものである。そうするのに平均して2時間以上かかってはならないことになっている。教授が自分の授業の必読図書であると図書館に通告したすべての図書は、館外貸出を止められ(ただしオーヴァナイトは別として)、必読の資料を読むための特別の室内か、その室に隣接している閉架のセクションに移される。一般にこの部屋には開架式の参考図書はおかれていない。

授業と授業の間に学生は大勢やってきて、そこの特別貸出のカウンターにならび、科目の番号と欲しい書名を告げ、たちまちにしてそれを受け取ると、もうすでに大勢が群がっている長い机のところに行ってノートをとるために腰を下す。1冊の制限時間は2時間である。財源の多寡により、図書館ではクラスの学生5人ないし10人につき1冊の割合で複本を備える。学生はその本を済ますと、それを返却図書の差入口から返すか、動いているベルトの上に乗せて返す。するとその本はただちに書架へ戻され、次の請求に応じられるように用意される……。<sup>35)</sup>

Munthe が1930年代の終りに観察した光景は1960年代でも見られたところのものである。現在もしこれに加

えるものがあるとなれば、たとえばブルックリン大学の例にみられるような、キープンチ、分類機、照合機を利用した機械化ぐらいのものであろうか。<sup>36)</sup>

技術的に大変効率のよいサービスの方法で一分の無駄もないと感心しながらも、Munthe は次のように疑問を投げかける。

しかしこれ(リザーヴ方式)が“開架方式”のこの国のやり方としてよいものであろうか。リザーヴ・ブック室を利用する学生は——たぶんテストや試験の直前になるまでは、彼らはめったに他の閲覧室にはこないのであるが——自分が勉強している主題分野の文献と関連した物の見方を持つようにはならないのである。

学生を図書館に駆り立てる原動力は、ある特定の本の若干ページを読めという教授の要求であるべきではなく、むしろ主題文献全体の総合的な物の見方、またさらにその主題に関する何冊もの図書を読んでもっと深く研究することによって、その主題分野を知ろうとする学生自身の欲求でなければならぬ。そういう理由で、すべて課題とされた図書は、科目または教授別に配して開架書架で接しうるようにすべきである。<sup>37)</sup>

自宅で読むべきか図書館で読むべきかの問題について、Munthe は次のような意見を述べている。

教授が一般図書の書架からリザーヴの書架に移したと思う図書の種類もいろいろあって、あるものは数冊の図書に過ぎないが、大部分はできるだけ大きなリストを作ったことを誇りにしている。しばしば、これがまったくのこけおどかしで、大部分の図書は学生にとって何の役に立たないものである。さらにある大学でリザーヴ・ブックの利用調査をしたところ、閲覧された図書の80%はリザーヴ・ブックの30%によってなされたことが判った。すなわち、70%の図書は元の位置に返せば、学生は通常の2週間の館外貸出により、もっと有益に利用できたのではないかと考えられる……<sup>38)</sup>

Munthe は北方ゲルマン系の北ヨーロッパの国々と米国との基本的な相違は次のような点にあると考える。すなわち、“米国の学生は大学が必読の図書を十分な部数だけ備えることを期待し、そのかわり学生は多額の月謝を支払う覚悟をしている。北ヨーロッパの国々では、実

際問題として授業料は無料に等しいが、そのかわり学生はずっと多くの図書を自分で購入することを要求される。ヨーロッパの図書館では、1種類の本を5部、10部、20部、30部も複本を備えるために図書予算から多額のものを引き去ることは考えられないことである。<sup>39)</sup>

Munthe はど歯に衣を着せないで、米国の図書館界を批判したものはいないかもしれない。しかし彼のリザーヴ・ブック・システムに対する批判の中には、読むことを学生に課する教授の態度にも痛烈な批判が向けられている。図書館のサービス技術に感心しながらも、そこに本質的な点が見落されていないかと鋭く観察しているし、学生がコマネズミのように忙しく振舞うのを見ながらも、彼らはどのようなものの見かた、判断力を得たのかと疑うのである。

### III. わが国の指定図書制度

わが国に米国のリザーヴ・ブックの制度が輸入され、指定書または指定図書という言葉がつくられた最初は、関東大震災後復興された東京帝国大学附属図書館であった。この影響はただちに京都帝国大学附属図書館に現われた。さらに降って、第二次大戦後に新しくできた国際基督教大学において米国式リザーヴ・ブック・システムが採用された。

その後、若干の大学図書館において指定図書制度を採用しているということが言われたが、その名称で呼ばれたものが、果して現在考えられている指定図書であったかどうか疑わしいものであった。

この章では、わが国で指定図書の発祥以来現在に至る過程をたどり、指定図書制度を実施している若干の大学図書館の現状を記録に基づいて分析しようと思う。

#### A. 指定図書制度の歴史

「指定書」あるいは「指定図書」制度といわれるものが、わが国で初めて採用されたのは関東大震災後に復興新設された東京帝国大学附属図書館においてであった。「東京帝国大学図書館復興報告第三」に、“その間〔1925年〕五月より七月にかけて、姉崎図書館長は海外に旅行して、完成十年以内の大学図書館を巡視し、専門家の意見を求め、その結果を齎らして更に建築部長と協議を進め、建築委員会の決議を経て、建築設計を確定したるは昨年〔1925年〕十二月十五日なり……此方針に基きて確定したる建築設計によれば、建物大體は三階乃至四階にして……図書館としての主要部は第三階にあり。この主要階は……閲覧目錄及貸出部（一四四坪）あり、それよ

り一般閲覧室（三一二坪）、指定書閲覧室（一八四坪）、特別閲覧室（七五坪）に通じ……<sup>440)</sup>とあるから、姉崎正治館長が1925年5月から7月にかけて海外視察旅行中にリザーヴ・ブック・ルームを見、指定図書室の概念を得られたものと想像される。この報告にある建築設計に基づいて東京帝国大学附属図書館が、新築竣工したのは昭和3年（1928年）12月1日のことであった。

竣工の際、同図書館復興の概略を解説した文書<sup>441)</sup>が姉崎図書館長によって作られたが、その中に“指定書閲覧室、坪数 150、座席数 304”と記されている。

最初（昭和3年12月5日）に施行された「東京帝国大学附属図書館規則」によると、

“第三条 本館備付ノ図書ヲ分チテ左ノ五種トス”

とあって、その三に、

“教授上ノ必要ニ由ル指定図書”

が挙げられている。また

“第十四条 閲覧室ノ種別”

の2番目に、

“指定書閲覧室 指定図書ヲ閲覧スル所ニシテ本学生生徒ノミ之ヲ利用スルコトヲ得”

とあり、さらに、

“第十六条 指定図書ヲ閲覧セントスル者ハ指定書閲覧係ニ就キテ前条同様ノ手続ヲナスベシ

指定図書ト一般図書ヲ閲覧セントスル者ハ一時ニ二冊ヲ限り指定書閲覧係ヲ通ジテ之ヲ借スコトヲ得”

となっている。前条同様というのは、学生証生徒証を係に差出し、借覧証に所定の事項を記入して、図書の貸付を受け、座席票を受取りその指示する座席につくことを指しているのであって、当初は指定図書もその書庫に学生は入れなかったのである。

“第二十条 借覧ノ図書ハ利用ノ後直ニ閲覧係ニ返納スベシ”

“第二十一条 諸室ニ備付ノ図書ハ当該室以外ニ持出スコトヲ禁ズ”

“第二十二条 一般閲覧室及指定書閲覧室ニ於テ利用者ガ一時間以上其ノ座席ニ在ラザルトキハ其図書類ヲ収メ之ヲ空席トシテ取扱フコトアルベシ  
前項ノ取扱ヲ受ケタル利用者ガ尚ホ図書ヲ閲覧セントスルトキハソノ旧座席票ヲ差出シテ更ニ借覧ノ手続ヲナスベシ”<sup>442)</sup>

以上の諸規定のうち第十六条は昭和15年（1940年）1月15日ニ改正され、

“第十六条 指定図書ヲ閲覧セントスルモノハ指定書閲覧係ニ学生証生徒証ヲ差出シ自ラ指定書庫ニ入リテ図書ヲ検索シ借覧証ニ所定ノ事項ヲ記入シテ貸付ヲ受クベシ”<sup>443)</sup>

とあるように、指定書閲覧室の中央にある指定書の書庫に、利用者である学生が自由に出入することができるようになった。

新築竣工に際して配布された「東京帝国大学附属図書館利用者案内」には巻頭に設計の略図面が掲げてあって、主要（第三）階の東側に面し、指定書閲覧室が示してある。本文の第八項に“指定書閲覧室”として

“東側三階全部を占めて、本館中最も閑静な処である。此室は補習閲覧室とも称すべきもので、本学の学生生徒が日々受ける授業を更に完全なものにするため、補習する便宜を図る閲覧室である。この部屋は学生証生徒証を持つ者のみ利用し得る。

“この室には各教員がその授業に参考書として必要と認めた準教科書ともいふべき指定書が備えられている。

“指定書を借覧するには室の中央に居る閲覧係に就いて借覧の手続をすべし。

“指定書は同一の本を数部宛備付てあるが、限りある部数を多数の学生が借覧するものであるから、長時間に亘る独占をしない様に心がけてほしい。

“指定書と共に一般図書の借覧も一時に二冊を限って出来るから、その希望があればこの室の閲覧係について借覧の手続を執るべし。（規則第十六条）”<sup>444)</sup>

とあり、また、次の第九項“一般閲覧室”の説明には、“一般閲覧室は研究閲覧室である。単なる補習のための読書にこの室を利用することは真の研究者の妨害になる”と記されている。

姉崎図書館長はこの“指定書閲覧室”が得意であったらしく、竣工式で報告した際に、この図書館の2～3の要点を述べたが、その中で

“第一は閲覧室の種別で、一般閲覧室に関しては、従来の施設と大体同様であるが……本邦で未だない点では、準教科書又必要参考書というべき指定書閲覧室に於て、簡便迅速に所要の図書を利用者に提供し得る設備がある……”<sup>445)</sup>

といっている。

昭和14年（1939）3月に編纂された利用案内によると“指定閲覧室”の説明は次のように変っている。

“三階東側にあり、定員三百名である。補習閲覧室と

も称すべく、学生生徒が日々受ける授業を更に完全なものにする為、各教員の指定した図書を備付けてある。この制度は本館の特徴の最たるものである。利用者は学生生徒に限られる。

“此室では座席票で座席を指定していないから各自好む席を占めればよろしい。

“室の中央に書庫が一区劃をなし、指定書は各学部別に区分され、それが更に各講座学科別に細別されてある。利用者は各自この書庫に入り、左の手續規則に依って図書を選択借用することが出来る。

一、入庫の際は学生証（又は生徒証）を係員に提出して入庫票（仮に座席票を代用している）を受取ること。

二、外套は脱いで入庫すること。

三、鞆、風呂敷包などを携帯しないこと。

四、同時入庫者が十名以上になった時は空くまで待つこと。

五、在庫中図書の位置順序を乱さぬこと。

六、借用は一人一時二部三冊までとする。

七、図書を撰び書庫を出る時は借覧用紙に所定の記入をして係員に提出すること。

八、使用済の図書は係員に返し、引換に学生証（又は生徒証）を受取ること。”<sup>46)</sup>

上記のように東京大学図書館における指定図書の歴史はかなり古いもので、この指定図書閲覧室は故岸本英夫館長の発意で三階北側に一般教養書と指定図書を合わせた開架閲覧室に改装されるまで33年間続けられたのである。この改装による指定図書の閲覧室については、現状を説明するときに触れることにしよう。

東京帝国大学附属図書館の竣工ならびに指定図書制度は京都帝国大学にも影響を及ぼした。昭和4年(1929年)6月、京都大学附属図書館館長新村出教授は第13回商議会で図書館新営案を説明し、次のような表現をしている。

“単ニ東京帝国大学附属図書館ノ新ニ宏壯雄大ニ建築シタルニ倣ハントスルニアラザルモ……本学ノ中央図書館トシテノ使命機能ヲ充分ニ果サントスルニハ、少クトモ此程度ノ設備ヲ必要ト認メタルニ因ル……”<sup>47)</sup>

会議後、新村館長は新城総長とともに上京、新築の東大図書館を見学した。同月に開催された次の商議会で、新村館長は東大の模様を詳しく説明し、また新城総長は次のような報告をしている。

“専門用図書ト一般用図書トヲ別チ考フルニ……一般

用ノモノハ学生ヲシテ広ク高等教育ヲ受ケシムル為メニ、指定閲覧所ヲ設ケテ之ヲ充分利セシメント欲スルモノナリ。此事ハ各学部ノ考慮次第ニテ、何時ニテモ実施スルヲ得ンカト思ハル……”<sup>48)</sup>

京都大学のこの時の図書館新営案は実現を見ずに終わった。しかし、“大学図書館の理念をめぐる討議の中から、指定図書制度が提案可決され、この年〔1929年〕から実施されることになった”<sup>49)</sup>という。

しかし実際の実施は昭和5年(1930年)4月からであったようで、3か年継続事業として予算1,500円、第1年度は739冊をもって発足した。これらの指定図書は“7学部別に分類陳列し利用し易いように接架式とした結果、学生の好評を博し、指定書を利用する者の数は次第に増加し、今まで余り図書館を利用しなかった自然科学系の学生の利用者もとみに増加するに至った。”<sup>50)</sup>

3年目には合計約1,700冊に達し、その後は経常費、臨時費で新規購入を行なったり、学部学科より図書の提供を受けたこともあった。時代のうつりかわりとともに、指定書に関する関心が低下したので、昭和12年(1937年)に館長から各教室主任に指定書選定を依頼した。以来指定書は増加の一途をたどり、昭和18年(1943年)にはほとんど4,000冊に達した。しかしその後戦争のため補充が不可能となり、戦後は従来の備付図書の利用価値がはなはだ小さくなってしまった。昭和33年(1958年)に図書館商議会で指定図書制度の問題が取上げられ、各局部に再び選定依頼をするようになった。<sup>51)</sup>

以上述べたように、わが国においては1928年の12月から東大で、また、それを見倣った京都大学においては1930年4月から、指定書の制度が採用されたのであるが、これらの指定書を選定した教官側では必読の図書に限って通告したものではなかった。その多くは学生に読むことを推薦するという意味であって、必ずしも教官の授業と直接関係のないものも含まれていたようであった。指定図書閲覧室があってこそ“学生は講義の補習をすることが出来るので図書館は教室と聯絡した事になる。”<sup>52)</sup>という当初の期待通りには運ばなかったようである。東大、京大の2校を除いては指定図書の考えかたを実施しようとした大学図書館は戦前の日本にはなかった。

戦後大学制度が変り、米国流の教授方法も考慮されるようになるにつれて、日本での指定図書制度も再び検討されるようになってきた。最初に図書館人の目に映った米国流リザーヴ・ブック・システムは多分、国際基督教大学図書館のそれであったろう。この図書館は1948年の

創立当時から、米国流の図書館サービスを行なって注目を惹いたが、しかし、これは米国流の特別な大学だからできることであって、日本の普通の大学へこのような制度を導入することは、とても考えられないとする図書館人もかなり多かったと思われる。

1952年、文部省では国立大学図書館改善研究会を設置し、国立大学の図書館のあり方を研究させたが、その成果は1953年1月に「国立大学図書館改善要項及びその解説」として公刊された。その要項によれば、

- 6 大学図書館の学生に対する運営の改善について  
二 図書館内には別に学生のための指定図書を設け、学修上必読の基本的参考書を備えつけて自由に閲覧させ、これらの図書は必要に応じ同一のものも相当部数備えつけるようにすること。<sup>55)</sup>

とあり、また、同改善要項の解説によると、

指定図書室とは教官の講義に関連して、学生に対し必読を求められた文献を図書館内に別置する図書室で、図書館は当該教官の要請に基いてこれら図書を一定期間ここに備え付け、その期間中は貸出を禁止するが、その指定図書は時には同一図書を数部備えつける必要も生ずる。このように講義に直接関連をもつ学生の勉強への便宜を考慮することによって、教官、学生、図書館の一体的関係が確立される。<sup>54)</sup>

となっている。

さらに昭和31年5月に発表された「私立大学図書館改善要項」は、“施設に関する要項、2. 図書館利用者のための施設”のなかで、“B. 出納台中心の施設、”のf項で、

指定図書を収める書棚を出納台の後方に設ける。これは指定図書の貸出に於いて敏速が最大の要件であるからである。大図書館に於いて、指定図書室を特設する場合には利用者出入の頻度と便宜のため、これを図書館の入口の近くに置くべきである。<sup>55)</sup>

としているが、さらにこれを解説して次のように記している。

指定図書というのは、わが国でややもすれば〔誤〕解

されるように、大学の教授が、その専門の学科の範囲に於いて、学生のために選定した標準的な参考書という意味のものではない。それは大学に於ける講義に関連して学生が教授から必読を命ぜられた図書で、当該教授の請求により図書館が普通書架から撤去して一定期間特定の書架に別置し、一般の貸出を禁止して、専らそれらの学生の利用に供するために留保しているものをいう。アメリカに於いては、指定図書は聴講学生十人に対し一部位の割合で複本が用意される場合が多い。これらの図書は、閲覧室内の周囲の書架に学科別に配列されることもあるが、それよりも出納台の後方の特定書架に収められる場合がはるかに多い。指定図書は、一時間・二時間・一夜、時には一日、二日という短時日を限って貸出される。したがって貸出の手続は、通例、普通図書のそれよりもはるかに簡単である。指定図書に対する貸出の請求がいつも授業時間の直前に殺到するため、敏速なサービスが絶対必要となる。また、指定図書は請求記号によってよりも、むしろ、著者と書名によって請求される故、指定図書閲覧室は閲覧者用目録に近接したところに置く必要はない。指定図書の貸出は指定図書閲覧室内にあってもいいが、その直ぐ外側に置くことができれば一層よい。指定図書閲覧室には辞書一冊と地図帳一冊もあれば、一般の参考書などは備付ける必要がない。したがって指定図書の書架を他の場所に備付ければ、指定図書閲覧室には壁付書架を置く必要が全然ないわけである。

建築上の理由から一般閲覧室を二階に置く場合には、指定図書閲覧室は一階の入口の近くに置いた方がよい。<sup>56)</sup>

このように、わが国では国立私立等の「大学図書館改善要項」の中に、指定図書の定義がみられ、またその制度の運用について示唆が与えられてきた。

昭和30年代の終りころに、特に関西地区の国立大学の図書館界から強い要望もあって、文部省でも指定図書制度を実施するため予算を計上することを真剣に考慮するようになり、大蔵省と折衝の結果昭和41年度(1966~67)から、その実現をみるにいたった。

昭和43年の「指定図書制度実施要項」によれば“指定図書”は次のように定義される。

“教官が講義等に直接関連して、学生に必読すべきも

のと指定し、多くの場合、試験演習等の際には、その内容も出題の対象となる「教官指定学生専用図書」をいう。”

そして指定図書の範囲には、(イ)教科書(学生が自ら購入すべきもの)、(ロ)参考書(指定図書よりも広い意味で参照利用するもので、学生に必読を課するものではない)、(ハ)参考図書(通読を必要としない目録、索引、書誌、便覧、辞典、事典、地図等)は含まないものとしている。<sup>57)</sup>さらに、“教官が自らの講義等の内容にしたがって、開講に先立ち指定図書を附属図書館に備付けることを求め、附属図書館では一般図書と区別して配架し、原則として開架閲覧方式に複本を準備して学生の利用に供するものである。これにより、教官は指定図書の内容を勘案しながら講義等を行なうもので、教官、学生および附属図書館の三者が一体的関係を保ちながら、教育効果を高めるものである”<sup>58)</sup>としている。

この制度は昭和41年度から実施されてきたが、当初の予算が大蔵省の査定により大きく削減されたので、“態勢が比較的整備されている大学から順次……この制度を実施する”ことになり、第1年度は4年制大学10校と短大1校にそれぞれの入学定員に応じて指定図書購入費を配当した。さしあたり主として一般教育課程の第1学年および第2学年の学生が対象となっており、科目は原則として一般教育課程を主とする62単位相当科目が対象となっている。指定図書制度を実施して指定図書購入費の配当を受けるのは、さしあたり2年間で終り、毎年あらたに約10校の大学が指定図書購入費を配当されてきた。

ここにいう指定図書購入費配当額は、次の方式で算出される。

配当額＝1冊単価×入学定員×複本率×1学年当り

授業科目×1数授業科目当り指定図書種類数

指定図書一冊平均単価を1,000円、複本率 $\frac{1}{10}$ すなわち、10人に1冊の割合、1学年当り授業科目数8科目(卒業するに必要な最低単位数124単位の1学年分31単位を1科目当り4単位とした場合の科目数)、1授業科目当り5種類を指定するとして計上されるので、

配当額＝1,000円×入学定員× $\frac{1}{10}$ ×8×5

＝4,000円×入学定員

ということになる。<sup>59)</sup>

以上のほか、この「要項」には実施を円滑効果的にするため数多くの留意事項が記されている。

この国立大学図書館に対する文部省の指定図書購入に対する予算割当の実施は、昭和41年初期の3億円の要求

が10分の1に削減されたので、毎年平10均校ほどに対し約3千万円くらいの割当て、同じ大学に対して2年間割当を継続し、そのあと割当は打ち切られ、新たに別の大学が割当を受けるという方法をとっている。

この国立大学図書館における指定図書制度の実施は予算配当の裏付けがあるので、多くの国立大学図書館が指定図書に関心を寄せ、予算配当のない大学図書館においても自費で実施する傾向を助成している。

## B. 指定図書制度の現状

指定図書という言葉は、震災後復興した今の東大図書館が新営される際に、時の館長姉崎教授が米国のリザーヴ・ブックから着想を得て、初めて使われたもので“教授上ノ必要ニ由ル”図書を指していた。学生に対する説明は“各教員がその授業に参考書として必要と認めた準教科書ともいうべき”図書であった。少し意味が漠然としている点があるにしても、姉崎館長の考えがリザーヴ・ブックを指向していたことは理解できる。しかるに、この指定図書がリザーヴ・ブックとは異なる存在となってしまったのは何故であろうか。“この場合の指定書は……リザーヴ・ブックとは根本的に異なり、いわゆる基本的図書を半永久的に排架している”<sup>60)</sup>ことになるのである。

わが国の大学図書館はもともと、学部学生に対し閉鎖的であったが、戦後、学生に対して開架式を利用するところが増加して来た。この開架された資料は、そのほとんどがいわゆる学生の教養に役立つと思われる資料で、その構成には教員の示唆を仰いだので、学科目に関連のある資料も推薦されれば、この一般教養図書のコレクションの中に加えられたのである。

指定図書制度を実施している大学について調査したのは、昭和38年(1963)国立大学附属図書館研究集会の開催中、データを集めたものがある。<sup>61)</sup>これによると41大学が実施しており、計画中のもの14大学、計画のない大学18大学となっているが、この調査は“項目についての説明もなく作られたものであるから、記載者によって意味を取違えている部分も少くない……指定図書と云っても所謂指定図書なるものか、似て非なる指定図書かと云うことである、”と述べられているように、当時指定図書としたものには、学生閲覧用図書がほとんどであり、現在においても、まだ多くの大学図書館員や教員の理解はその程度であろうと考えられるふしがある。“学生閲覧用図書”は必ずしも教科に直接関連なく選ばれたもので、学生の教養書として、その多くは学生の利用に便利ように開



架あるいは半開架式に特定の室または場所に配置されたものである。選択に際しては、教員の推薦によるものが多く、あるいは図書館側で新刊書の中から選びこのコレクションに加えられたものもある。

従って、その後に発表された文部省による全国の大学図書館の実態調査の統計データも、指定図書に関する限り、その内容に信を置くわけにはいかないが、昭和42年(1967)に行なわれた昭和41年度の調査データによると、大学数は国立71校、公立37校、私立235校、合計346校で、そのうち「指定図書制度を実施している大学は168校(45.5%)あり、設置者別では国立大学は82.4%、公立大学は41.7%、私立大学は39.0%がこの制度を実施している」<sup>63)</sup> ことになっているが、この中には「指定図書制度を実施しているといっても指定図書を教員が学生用に講義等と直接関連なく選択推薦する程度のものもあり、厳密な意味で、教員が直接講義等に密接に関連して指定する図書の相当数を複本として準備し運用する指定図書制度とは云いがたいものが含まれている」ことは前述の通りである。

指定図書室を持っていると答えたものは国立大学で29館(39.2%)、公立で5館(13.9%)、私立では22館(8.7%)であった。<sup>63)</sup>

また指定図書の利用については、平均で国立大学では延6,782人、10,704冊、公立大学では2,241人、2,527冊、私立大学では6,368人、9,624冊となっている。<sup>64)</sup> 指定図書の冊数が一校平均国立3,280冊、公立496冊、私立2,184冊であることを考えると、国立大学の指定図書は冊数は最も多いが、最も少ない率の利用しかされていないとも考えられる。

指定図書の現状に関して、統計を利用して結論に導こうとすることは、入手しうるデータが内容的に異質であるために、不可能である。これは指定図書の定義あるいは解釈に係わる問題でもある。そしてこのことは、わが国の指定図書制度の混乱した状態を物語るものでもある。

わが国の個々の大学図書館における指定図書制度の実施の現状を説明した文献は余り多くない。以下文献に現れた若干の実施例を紹介しておく。

**国際キリスト教大学図書館** この図書館では創立の当初から米国式のリザーヴ・ブック・システムを採用してきた。このことはかなり多くの図書館人に知られていたが、最初にこの図書館におけるリザーヴ・ブック・システムを記事として紹介したのは青野伊豫児である。彼は、

ICUは1949年に創立され、ニューヨークにICU Foundationを持つ大学で、ここの図書館も出発の時から、今までの日本の大学図書館とは異なった姿で、注目をひいていた。現象面ですぐれたレファレンス室の運営、完全な自由接架式、そして典型的な指定図書制度などにその特色をみることができる。この大学の教師は講義のアウトラインを作り、このアウトラインにはビブリオグラフィをつけ、この中から必ず読むべき本を指定する。学生はこの指定された本を読んで講義に出るか、あるいは補習のために読む。受講科目の指定書のリストは授業のはじめにもっている。一方、図書館側では教師にその指定する図書を学期の開始2週間前に要求し、これらの指定図書を揃えて指定書書架に配列する。配列は指定した教授名のABC順である。この当時42名の教師によるリザーヴされた図書は約1,000冊であった。当時この大学の教員数は53名、学生数約700名、図書館蔵書は約80,000冊であった。複本は最高学生8人に1冊まで備えつけることができるようになっており、貸出閲覧は館内閲覧2時間とオーヴァナイト、1日間および3日間の3種類あり、期限を過ぎると延滞料をとられる<sup>65)</sup> としている。

その後、近川澄子は第5回私大図書館研究集会の報告で、リザーヴ・ブック制度について論じた際、「ICUに於ては創立当初からリザーヴ・ブック制度が採用されており教室学習と図書館学習の同時性が保たれている。即ち、学生は教室で講義を聴くのみでなく相当量の reading assignment を課せられ、これらを読んだ上で、ディスカッションに参加し、レポートを提出する。試験もノート以外にこれらの資料に基づいてなされる」ことや、「ICUに於ては外人教授が多い関係上、教授側の図書館並にリザーヴ・ブック制度に対する理解と協力は大体においてスムーズにいったい」こと、また、リザーヴ・ブックを準備するための手続きも解説している。「ICUにおいては一応8人に1冊の規定が置かれているが、実際は必ずしもこれによってはいない」<sup>66)</sup> とし、その理由も述べている。

ICU図書館のリザーヴ・ブック制度について最も詳細に報告した文献は榎井知子の論文である、この報告の中で、リザーヴ・ブックがよく利用されていることを利用統計から説明し、開館日65日間で3,302冊、1日平均51冊が利用されたことを報告しているが、これは社会科学系履習学生876名、人文科学系553名、自然科学系17名、語学112名、体育333名延べ計1891名の学生が計55科目

について備えられた 813 種、1,136 冊のリザーヴ・ブックの利用状況であって、延べ人員で割ると 1 人約 1.75 冊を 4 月の新学期から夏休に至るまでの期間に利用したことになる。しかし、一方では、同期間中 1 回も利用されなかったリザーヴ・ブックが 32%、3~1 回しか利用されなかったものが 26% もあったことも報告している。<sup>67)</sup>

近川は、1967 年<sup>68)</sup>にも 1970 年<sup>69)</sup>にも国際基督教大学図書館におけるリザーヴ・ブック制度について報告しているが、最近の報告によると、ICU の指定図書制度も 17 年を経、依頼教員は次第に増加し、現在 600 冊（冊数は学期により一定しないが 1,000 冊を越えることはない）、指定をもつ科目数 42、和洋の図書比 3:7、そのうち 70% はすでに以前指定をうけたものであるという。また、複本についてはかつて 8 人に 1 冊の基準によっていたが現在ではこれによっていないこと、1 日の貸出しは 30~40 冊（ただし、館内での 2 時間利用を含まず）で、試験期の貸出量は平常のほぼ 2 倍となること、などが記されている。

**東京大学附属図書館** 日本で一番歴史の古い指定図書制度をもつ東大図書館のことはすでに述べたが、故岸本英夫館長の同大学図書館近代化の構想の 4 本の柱のひとつは指定図書の増強であった。新しい大学制度における学習の仕方の基本方針からすれば図書館の指定書は不可欠であるという見地から、中央図書館はもちろん、教養学部図書館、医学図書館、農学図書館においても増強をはかって行った。中央図書館においてはそれまで、一般閲覧室（500 席）と指定書閲覧室（300 席開架式）が 3 階に設置してあったが、一般閲覧室を改修し、中央部に 3 万冊収容可能な書架を開架式に配し、指定書と一般教養書をならべ、340 席の開架閲覧室を設置した。<sup>70)</sup> この指定図書の配列について、黒住武は「指定図書約一万冊と一般教養書約二万冊とがこの開架閲覧室の中央部の間仕切りした書架に配置され、学部指定書は学部別——学科または講座別に、その中は受入順に配架され、大学院指定書は系別でその中は直ちに受入順になっている」と記している。<sup>71)</sup>

なお、東大の農学部図書館の指定図書の利用状態等について調査分析した山田映美の報告がある。<sup>72)</sup>

**九州大学中央図書館** この大学では昭和 37 年度（1962~63）から指定図書制度を採用し、1 講座 1 万 5 千円から 2 万円の範囲内で学部（文、教育、法、経、理、工、農）の専任講師以上の教官に、指定図書の推薦を依頼してきた。この指定図書利用統計によると、1 人当り

利用回数は昭和 37 年度（1962~63）3.5 回、昭和 38 年度（1963~64）5.9 回、昭和 39 年度（1964~65）7.3 回となっている。また、「一般に理料系学部の指定図書が利用度が高いのに比して、文料系学部の指定図書の中で、余り利用されないものが間々見受けられる<sup>73)</sup>」と報じている。

**名古屋大学教養部図書館** 同館の辻英雄の報告によると、この図書館では「昭和 38 年になって本格的にこの制度に取り組むことになった」という。最初、PR から初めて、昭和 39 年度（1964~65）、40 年度（1965~66）に各教官から指定図書推薦リストを回収した結果、指定図書制度が行なわれるようになったのであるが、「文料系の指定図書と理料系のそれとでは後者の方が多く利用された」こと、「大体試験前 1 週間に利用が集中した」こと、ただし、「理料系図書は期間中でも比較利用された」こと、「利用されない図書が多かった」一方、「利用される図書は数冊に限られている」こと、などの点が指摘されている。<sup>74)</sup>

**東北大学附属図書館** この附属図書館の指定書に関する考え方が同館の月報、図書館通信の昭和 40 年（1965）1 月、2 月、3 月の各号に掲載された。<sup>75)</sup> その後、8 月号に実施に移った当時の指定図書制度発足の状況が載っている。それによると、同年 3 月末に依頼文書が発送され、全講義数約 1,850 に対し 4.5 分の 1 の約 430 講義について指定希望書が出された。2,669 点、6,388 冊と集計された。聴講者 30 人以下は 1 冊、40 人以上は複本を考え原則として 50 人ごとに 1 冊としたが、5 冊をもって最大とした。整理の結果、6 月末から 7 月末にかけて 1,866 点、2,546 冊を発注し、「指定」という新ラベルを装備した。本館では特定の書架に学部順、講義順に配架したが手狭のため理工・農等の学部の学科図書室にそれぞれの分を置いている。また、時間ダイヤルを刷った閲覧票を新しく作り使用した。<sup>76)</sup>

**東京学芸大学附属図書館** 本図書館も文部省の特別予算配当を昭和 41、42 年度（1966~67、1967~68）に受けた大学の一つであるが、田沢恭二によると、「指定図書制度は昭和 37 年から部分的に実施された」という。この指定図書は「必読文献のほかには読むことが望ましいとされる参考書的な図書も含んでおり、現在は 1~2 年の受講科目を中心に実施されている……指定図書約 1 万冊（語学テープ・レコードをふくむ）を 2 階の指定図書室に集め……科目別教官別に配架して学生の利用に供している……貸出しは館内が 1 回 3 冊以内、館外が 1 週間 2 冊

以内となっているが、利用状況を見ると、館外貸しが全体の92%と圧倒的多数を占めている……利用状況は41年度12,080冊、42年度21,463冊、43年度21,973冊とやや頭打ちになっている”という。<sup>77)</sup>

また、北島武彦の最近の論文<sup>78)</sup>にも、この大学図書館における指定図書が、昭和37年(1962)に道徳教育の研究を対象に48冊から発足し、現在に至る発展のあらましが記されている。

**電気通信大学図書館** ここは文部省の指定図書配当金を41年度と42年度に受領した図書館であるが、沢田健の報告によると“現在(1967年)21授業科目について平均4.5種類、受講学生10人につき1冊の複本率で合計2,250冊を備えている。”この図書館は全開架方式で利用者がきわめて多く館内はすでに飽和状態に達しているため、“やむを得ず指定図書の運用は別室で貸出を中心に行なっている。貸出手続については係員はノータッチで学生自身が手続して退室するしくみである。”“期間を短縮すれば回転率は早くなるが、学生にとってはじゅうぶんに活用できない場合が多く、学生に対するアンケートにもこの不満を訴えているものが圧倒的に多い<sup>79)</sup>”という。

**琉球大学附属図書館** この図書館における指定図書制度に関しては、石川清治の“学生の図書館利用学習”という論文に説明されている。それによると、リザーヴ・ブック制度は1963年10月から実施され……教官総数182名の中、85名がリザーヴ・ブックを設置している……教師一人当りのリザーヴ・ブック平均設置冊数は22.4冊である。リザーヴ・ブックの入れ替え率(1964~65)は10%、170冊で、残る1,713冊(90%)は継続設置となっている。石川の行なった教師(常勤講師以上)1/3を抽出、インタビューして得た結果によると、サンプルの教員のうち、約1/3がリザーヴ・ブック設置者であったが、科目に登録した学生に読むことを義務づけているものは70%あり、講義に引用・参照するものも70%あった。しかし、学生は指定された図書を読まなければよい成績はとれないが、単位は得ることができるというものが75%あったという。<sup>80)</sup>

**国学院大学図書館** ここには3つの学生閲覧室があるが、前島重方によると、“国学院では三つの閲覧室がすべて開架式(約一万三千冊)で……41年度の例では、参考閲覧室の一隅に大学院の文学作品研究に関連して十種類、学部は文学作品研究(漱石、龍之介など)に関連した約二百冊、他に普通の開架書架中に国際法、経済学史

第1表 文部省指定図書制度予算配当実施済  
または実施中の国立大学

大 学 名	41 年度	42 年度	43 年度	44 年度	45 年度	46 年度
北 海 道 大 学						
北 海 道 教 育 大 学 (函館分校)			*	*		
” (札幌分校)				*	*	
” (釧路分校)					*	*
室 蘭 工 業 大 学		*	*			
小 樽 商 科 大 学	*	*				
帯 広 畜 産 大 学			*	*		
北 見 工 業 大 学				*	*	
弘 前 大 学					*	*
岩 手 大 学						
東 北 大 学						
宮 城 教 育 大 学			*	*		
秋 田 大 学				*	*	
山 形 大 学	*	*				
福 島 大 学						
茨 城 大 学			*	*		
宇 都 宮 大 学						
群 馬 大 学					*	*
埼 玉 大 学					*	*
千 葉 大 学				*	*	
東 京 大 学						
東京医科歯科大学		*	*			
東京外国語大学						
東京学芸大学	*	*				
東京農工大学						
東京芸術大学			*	*		
東京教育大学						
東京工業大定						
東京商船大学		*	*			

リザーブ・ブック・システムと指定図書制度

大 学 名	41 年度	42 年度	43 年度	44 年度	45 年度	46 年度
東 京 水 産 大 学		*	*			
お 茶 の 水 女 子 大 学						
電 気 通 信 大 学	*	*				
一 橋 大 学	*	*				
横 浜 立 国 大 学						
新 潟 大 学						
富 山 大 学						
金 沢 大 学				*	*	
福 井 大 学	*	*				
山 梨 大 学		*	*			
信 州 大 学						
岐 阜 大 学	*	*				
静 岡 大 学			*	*		
名 古 屋 大 学						
愛 知 教 育 大 学				*	*	
名 古 屋 工 業 大 学		*	*			
三 重 大 学						
滋 賀 大 学						
京 都 大 学						
京 都 教 育 大 学	*	*				
京 都 工 芸 繊 維 大 学				*	*	
大 阪 大 学						
大 阪 外 国 語 大 学						
大 阪 教 育 大 学			*	*		
神 戸 大 学						
神 戸 商 船 大 学		*	*			
奈 良 教 育 大 学		*	*			
奈 良 女 子 大 学						
和 歌 山 大 学						
鳥 取 大 学		*	*			
鳥 根 大 学					*	*

学 校 名	41 年度	42 年度	43 年度	44 年度	45 年度	46 年度
岡 山 大 学	*	*				
広 島 大 学			*	*		
山 口 大 学					*	*
徳 島 大 学			*	*		
香 川 大 学					*	*
愛 媛 大 学		*	*			
高 知 大 学				*	*	
福 岡 教 育 大 学		*	*			
九 州 大 学						
九 州 工 業 大 学				*	*	
九州芸術工科大学						
佐 賀 大 学			*	*		
長 崎 大 学					*	*
熊 本 大 学	*	*				
大 分 大 学				*	*	
宮 崎 大 学					*	*
鹿 児 島 大 学				*	*	
図 書 館 短 期 大 学	*	*				

註 \* 予算配当年度

すべて空欄となっている大学は46年度またはそれ以後に配当の予定。

などの講義に関連したところの図書について指定図書のな方式をとった。大学院の場合の一種類は「実施要項の  
 いうような指定図書（複本も二名に一冊宛ある。禁帯出  
 抜）で、他は講義終了までに必読のものであった。学部  
 の場合は特定作家の作品を学生各自が選択・研究し、指  
 定された日に教室で発表するもので、一回一冊三日間の  
 貸出（一般書は三冊以内一週間）をしてきた。……普通  
 の開架書架にある場合は参考書性格の強いものである<sup>81)</sup>という。

以上の文献のほか、昭和41年（1966）以来、文部省の  
 指定図書予算割当を受けた国立大学50校（第1表参照）  
 の「指定図書制度実施報告書」によると、それらの大学  
 図書館の指定図書制度の実施状況がよく判るものもある。  
 これらの大学図書館では指定図書目録も発行してい

るが、これを一見して気が付くことは、参考図書の多いことである。いずれも複本数は余り多くなかったが、「理科年表」5冊(B大学)、「岩波生物学辞典」5冊(Z大学)4冊(Q大学)、2冊(J大学)「日本化石図鑑」4冊(Z大学)、日本化石図譜2冊(K, D大学)「最新植物用語辞典」1冊(J大学)、「共立化学大辞典」全10巻1揃(Z大学)などがその例である。これらの大学の図書館には参考書や参考図書室がないのかと疑われる。この種のうち、最も非常識と考えられるものは、保育社の「原色日本甲虫図鑑」上下各30冊、「原色日本蝶類図鑑」20冊、「原色日本植物図鑑」上中下各20冊、養賢堂の「日本雑草図説」11冊、以上いずれもS大学のある分校の場合であった。また、各種の「新書版」を10冊、20冊、30冊と購入している場合も多く見られた。

また各大学の指定図書制度実施報告書によると、教官の多くは基本的図書を教養用として指定しているのであって授業とは別にそれら指定された図書を自発的に読んで欲しいという程度のものが多い。しかし、教育効果が(多少の相違はあっても)あったと考えている教官が大多数であった。例えばC大学において教官、学生に対しアンケートをしたところ、教官では、教育効果に大きく影響を及ぼしよかったと思うもの20%、いくらかプラスであったと考えたもの70%であった。学生の答は、非常に効果があった(14%)、いくらか効果があった(51%)、あまり効果がなかった(23%)となっており、効果があると認めたものは65%に達している。E大学では教官の1/2がややよい影響ありとし、学生の80%が学習上の効果を認めたといっている。O大学における調査では、授業の進行を促進すると答えた教官が17%、講義の理解度を深めたと答えた教官が85%もあり、学生の答では学習上効果があがったとするものが67%あった。この大学では、この制度の実施により教授方法を変えた教官が24%あったというがどのような変化か詳細は判らない。指定図書制度を採用してから学生の利用率が増加したという報告も多い。V大学の報告には、第2年目に学内紛争が解決した後の10～2月の期間の指定図書利用状況を、第1年目と比較しているが、12月と1月は大した増加はなかったが、10月は前年の3倍近く、11月は約4倍、2月には前年度の10倍近くに増加している。

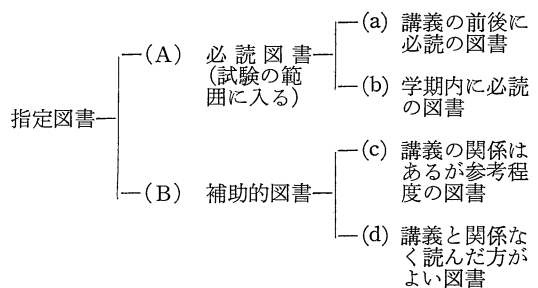
#### IV. わが国における問題点と今後の課題

##### A. 問題点

以上述べてきたわが国の大学図書館の指定図書制度は

多くの問題点をふくんでいる。第1の問題は定義上の問題である。米国のリザーヴ・ブックと日本の指定図書はその原点において同じはずのものであった。

指定図書とか教養図書とか学生閲覧用図書などと呼ばれる大学図書館にある図書は、元来図書それ自体に区別があるのではなく、その図書の利用形態による区分である。すでに述べたように、リザーヴ・ブックには必読としてクラスで宿題を課されたものと、副次的なリーディングとに分けられる。必読の図書には講義、演習または実験と並んで読むことを要求されるものと、レポートなどを作成したり、試験時まで読んでおくことを要求されるものと2つのタイプがある。副次的なものも講義と関係があり、それを読むことをすすめて奨励されるのであるが、試験の範囲に入るとか、ディスカッションの基礎にすることなどは必ずしも要求されていないものである。ところが、わが国で指定図書と呼ばれているものは、学生の参考になる基本的図書であると教員が考えたものがその大部分を占め、その内から試験が出されたり、それを使ってレポートを作製することは必ずしも要求されていない。大部分は学生のための基本的参考書であって、授業とは何ら密接な関係がないものも多いし、中には全然授業と関係のない教員推薦の“良書”というようなものまで入っている場合もある。辻英雄は推薦リスト、学生の利用態度、発表された論文などから指定図書を区分して次のように表現している。<sup>82)</sup>



リザーヴ・ブックには、(d) は明らかに含まれていないし、米国においては、(a) および (b) は閉架とされることが多く、(c) は一般開架図書といっしょに開架される傾向にある。現在、文部省が予算を配当する場合の指定図書は (A) のみを意味している。日本の大学図書館で、過去に指定図書として配架されていたものは大部分 (B) であったし、現在もその傾向が強い。

このことを裏づける京都大学附属図書館のアンケート調査がある。797名の全教授および助教授に対し質問し、

345通 (43%) の回答を得た。それを集計した結果、指定図書とは「講義、演習の内容を展開する意味で、参考的に読むことが望ましいもの」とであると考えたものが「教課の履習のため必ず読むべきもの」と考えるものの3倍あった。指定図書の利用の仕方については、「単に指定書を指示しておくだけ」という答が69%あった、という。<sup>83)</sup>

第2に、わが国の指定図書に関する文献の最も多くのものが取り上げている問題点であるが、それは運用上の問題である。

新坂平次は、指定図書の在り方に関して、私立大学図書館研究集会において研究発表をしたが、その中で、指定図書の流動コレクションと固定コレクション、複本、利用上の制限、配列、統計、閲覧方式、教官と図書館側の協力などの問題を論じた。<sup>84)</sup> 梶井は問題点として、配架、複本、予算を挙げている。<sup>85)</sup> 団野は問題点として、指定図書選定の方法、一般教養と専門課程での必要性、利用方式 (独立室、開架閉架、借出方式) 複本、更新、予算等について述べた。<sup>86)</sup> 北島は文部省の講習会において、指定図書について講述した際、実施範囲と教官、指定図書冊数、種類、指定手続、配架、複本、更新、目録、予算等について述べた。<sup>87)</sup> また、彼はこの問題について、後にやや詳しく発表したこともあり、<sup>88), 89)</sup> 最近の論文では運営上の問題点として、大学における授業形態の改革、教官・学生・図書館の協力、指定図書の管理利用を挙げている。<sup>90)</sup> 上記の他、施設的な問題については、津田良成の論文<sup>91)</sup>が一番まとまっている。この他にも多くの人が、指定図書の管理運営上の問題を論じている。これらは教員への協力要請、学生へのこの制度をPRするというような問題を含むにしても、すべて図書館側に重点を置いた問題である。

第3の、そして最も重要な問題は教員側の、すなわち教授方法に係わる問題である。すでに1957年、国際基督教大学図書館を見学したとき、青野は「レファレンスや自由接架式が図書館それ自身の方法であるのとは違って、指定図書制度は、教授の方法そのものである」<sup>92)</sup>ことを指摘した。梶井はこの教授方法の相違と、大学図書館の利用者の意識の相違、および大学の規模がわが国の大学図書館におけるリザーヴ・ブック・システムの実施を妨げる要因であると見做した。<sup>93)</sup> 黒住は「元来、教授の方法そのものとして、専ら教官側の教育体制にかかわる課題でありながら、現行は館側の知恵にのみ多くを頼る状態である」ことを嘆き、「指定図書についての真剣

な討議が、即刻全教官の課題として開始されることを学生のために切望」している。<sup>94)</sup> 田辺広も、「指定図書制度が図書館にとって、どんな重要な地位を占めようと、その主体は教官の側にある、」<sup>95)</sup> といっている。

この教員の問題——と云っても指定図書選定手続等に関して教員が図書館と密接に協力するとか、実施上の合意という問題ではなく、教授方法如何の問題である——は、恐らく次の学生の問題とともに最も重要な問題であろう。

最後の問題は、極く少数の執筆者しかふれてない問題であるが、これは学生の要求と指定図書制度の関係、あるいは指定図書制度と教育学習効果との関係に係わる問題である。

すでに1, 2例をあげて述べたように、指定図書制度実施大学が学生に対するアンケート調査をした結果を見ると、指定図書制度が学習上効果があったと答えた学生が過半数であったという報告が多い。しかし、どのような学習効果があったかということは明瞭でない。石川の調査<sup>96)</sup>は、指定図書を含む学生の図書館利用調査として興味深いものであるばかりでなく、教員の教授形態との関連においても調査が行なわれたという意味で甚だ有意義な調査であった。しかし、学習上の効果という点は調査されてない。古い調査であるが、McDiarmid は、7つのカレッジの学生計2,278人を対象として、彼らの読書または図書館利用調査を行ない、いかなる要素が彼らの図書館利用に影響を及ぼすかを調べた。その結果上級生ほど図書館の資料貸出が増加する傾向があること、また成績が平均してよいことを報告している。また、成績のよい学生は借出す図書が多いことも見出したという。<sup>97)</sup> 同様の問題に関するBranscombの調査分析は、いくつかの興味ある示唆を与えてくれる。たとえば、約2分1の学期間に一般教養書20種あるいはそれ以上を読み、さらに指定書50種あるいはそれ以上を読んだ学生は上位成績をとる傾向が強いが、寡読の学生 (1ヶ月当り貸出し1冊程度のもの)は、成績のパラツキが大きく、これが読む量と成績との相関を乱すのではないかと推察している。<sup>98)</sup>

## B. 今後の課題

指定図書制度を活用するか死物化するかは、今後の問題である。それには学生の要求調査と平行して、教授方法の改革という最も重要な点が解決されなければならぬ。図書館側が従来問題点としていた大部分のものは、運用上の問題であって、先にこの問題を解決しなければ

ならないはずである。

Lyle のいう教授形態の “第1のレベル,” すなわち single-textbook method とか lecture only という方法は、現在、わが国の大部分の大学で最も多く用いられている教授形式である。この方式に依存している限りでは、リザーヴ・ブックは必要がない。図書館側で、いかに手をつくして指定図書なるものを備えても、それと開架された推薦図書のコレクションとどこが違うのであろうか。Lyle のいう “第2のレベル,” Branscomb の表現を借りれば “teaching with books” の段階になって、初めてリザーヴ・ブックを使わなければならない事態になるのである。この段階で初めて学生は図書館に対し、必読を課せられた資料をととのえることを要求することになる。学生の要求のない資料を、何の為に金と手間暇を掛けて準備しなければならないのであろう。全く、あるいはほとんど、利用されない指定図書が、なんとたくさん、ほうぼうの大学図書館の学生用開架書架の棚の上に埃をかぶっていることか。

リザーヴ・ブック制度を有効に適用しうる学科目とそうでないものがある。例えば、語学、数学、体育などは、教科書の他に必ずしも多くのリザーヴ・ブックを必要としない場合が多い。これに反して、史学、社会学、思想史、政治学、経済学、心理学等は、ものの考え方や理念に関する資料をリザーヴ・ブックとして利用する教授法が適用しやすいし、生物系、理工系の科目では実験等に関連した資料や科学思想の関係の資料が必読となる場合があることを銘記して、科目によって適用に、適不適のあることも忘れてはならない。全部の学科目に画一的にリザーヴ・ブックの予算を配分する愚はさけるべきである。

リザーヴ・ブック制度を行なうために、教員がその教授方法を変えたとしても、すぐ効果的な制度が実施されるわけではない。学生数の著しい増大とか、予算の不足とか、困難な問題は数かぎりなくある。東京大学において、昭和37年（1962）から、本郷と駒場で1千万円に上る予算を計上してリザーヴ・ブック、すなわち新しい指定図書制度の確立を目指したにもかかわらず、国際基督教大学図書館におけるような米国なみのリザーヴ・ブック・システムができなかったのは何故であろうか。田辺は、大学の後進性に依るのかもしれないし、教官の無理解によるのかもしれないし、あるいは、図書館員の努力が不足したのかもしれないが、それにも増して、米国生

し、そして今もなおあるからだ、<sup>99)</sup> という。いろいろな大きな問題を解決して、図書館ははじめて、運用というむしろ些細な問題の解決を考えるべきであろう。

このリザーヴ・ブックを使つての教授方法は、学生がどれだけその問題を理解し得たか、また、どれだけ判断力を身につけたかなどを追求し正確に把握していなければ、次の講義に移ることができない場合もある。教員にとって、いうは易いが決して生易しい教授方法ではない。現在の指定図書は、よしんば必読として課されたといわれても、もし、教員がその教授方法を変えていないならば、それらの資料はその教員推薦の参考書の域を出ることはないであろう。

教員にとっても、図書館員にとっても、いつも不足しているのは、教育やサービスの方針を決定するのに必要なデータである。中でも、学生の要求に関して、大学の教員や図書館員は的確なデータを持っていない。企業体にとってマーケティング・リサーチによるデータが必要であるように、大学図書館では学生の要求調査を行ない、その要求と利用の結びつきをもっと積極的にはかるべきである。現在のような、一方交通のコミュニケーションは、教育とはいえないのではあるまいか。

仮に、Lyle のいう “第1のレベル” をどうにか脱出し得て、“第2のレベル” に入ることができたとしても、われわれは、それで満足すべき状態に到達しえたとは考えない。大学教育を了えた者は、問題点が何であるかを自分で把握する能力を備え、その問題を解決するため必要な情報を集める手段を知っており、それらの情報を使って最適な解決方法を決定するための判断力を身につけていることが要求される。これは “第3のレベル,” いわば independent study with books とでもいうべき段階で、教員は知識の片々を学生に教えるより、問題解決の指針を与え、学生は実力を涵養しながら、問題解決へと一步一步自力で進んでいく。このような状態では、程度の高低はあるにしても、学生の歩むステップは研究者とほとんど同じものとなるであろう。むしろ、リザーヴ・ブックの段階にあっては、学生が受ける図書館サービスはほとんどすべてクラリカルなものであったのに引換え、この第3の段階に至って、専門職のライブラリアンのサービスが学生にとって必要になるのである。

謝 辞

本稿を草するに当って、多くの人びとから貴重な示唆

を受けたり、文献入手等について協力をうけた。特にフロリダ州立大学大学院図書館学教授 Gerald Jahoda 氏、東京大学附属図書館整理課長田辺広氏、同館奉仕課長黒住武氏、東京学芸大学助教授北島武彦氏には文献に関して色々お世話になった。ここに記して感謝の意を表する次第である。  
(図書館・情報学科)

- 1) Metcalf, Keyes D. 1961 年 3 月 19 日の国際基督教大学図書館献館式における記念講演, 「大学における図書館の地位」 図書館雑誌, vol. 55, no. 9, 1961. 9. p. 289.
- 2) Lyle, Guy R. *The administration of the college library*. 3 d. ed. New York, H. W. Wilson, 1961. p. 1.
- 3) *Loc. cit.*
- 4) *Ibid.*, p. 145.
- 5) *Ibid.*, p. 145-146.
- 6) Shores, Louis. *Origins of the American college library, 1638-1800*. Hamden, Connecticut, Shoe String Press, 1965 (repr. from the 1934 original ed.) p. 215. 原典は *Harvard University. College book*, no. 8, p. 178.
- 7) *Ibid.*, p. 215-216. 原典は前述 *College book*, no. 8, p. 183-184.
- 8) *Ibid.*, p. 217. p. 216-217 に Wigglesworth 教授の提案全文が載っている。
- 9) "Special reserves," *Library Journal*, vol. 3, no. 7, 1878, p. 271.
- 10) "Restricted reference books," *Library Notes*, vol. 2, no. 7, 1887, p. 216-218.
- 11) Metcalf, Keyes D. *Planning academic and research library buildings*. New York, McGraw Hill, 1965. p. 108.
- 12) Lansberg, William R. "Current trends in the college reserve room," *College and Research Libraries*, vol. 11, no. 2, 1950, p. 121-122.
- 13) Branscomb, Harvie. *Teaching with books; a study of college libraries*. Chicago, ALA, 1940. p. 118.
- 14) Lansberg, *op. cit.*, p. 122-123.
- 15) Helm, Margie M. "Duplicate copies of collateral references for college libraries," *Library Quarterly*, vol. 4, no. 3, 1934, p. 420-435.
- 16) Hubbard, Charles L., Jahoda, Gerald, and Johnson, Terry. *Minimum cost decision model for additional copies of library books based on multichannel queueing theory*. Florida State University, June, 1968. [mimeo. 43 p.]
- 17) Branscomb, *op. cit.*, p. 17-32.
- 18) *Ibid.*, p. 119-120.
- 19) Lansberg, *op. cit.*, p. 123.
- 20) *Ibid.*, p. 122.
- 21) Braden, Irene A. *The undergraduate library*. Chicago, ALA, 1970. p. 18-19, 24.
- 22) *Ibid.*, p. 47-49, 52-53, 58.
- 23) *Ibid.*, p. 71, 72-73, 75.
- 24) *Ibid.*, p. 86, 87, 90.
- 25) *Ibid.*, p. 105, 107, 110-111.
- 26) *Ibid.*, p. 127-128, 129, 132.
- 27) Branscomb, *op. cit.*, p. 130.
- 28) Kusler, Alan. "Rental collection; pro and con," *Library Journal*, vol. 84, no. 11, June 1, 1959, p. 1753-1757.
- 29) Erlich, Martin. "The mass assignment," *Library Journal*, vol. 93, no. 18, Sept. 15, 1968, p. 3099-3101.
- 30) Braden, *op. cit.*, p. 53.
- 31) Burnett, A. D. "Reader failure; a pilot survey," *Research in Librarianship*, vol. 1, no. 6, 1967, p. 142-157.
- 32) Jahoda, Gerald, Hubbard Charles L., and Stursa, Mary Lou. "Academic library procedures for providing students with required reading materials," *College and Research Libraries*, vol. 31, no. 2, March 1970, p. 105.
- 33) Koch, Theodore W. "A symposium on the reserve book system," <A. F. Kuhlman, ed. *College and university library service*, Chicago, ALA, 1938> p. 73-99.
- 34) Kuhlman, A. F. "How reserve book collections can be made effective," <*his College and university libraries service*, Chicago, ALA, 1938> p. 102-105.
- 35) Munthe, Wilhelm. *American librarianship from a European angle; an attempt at an evaluation of policies and activities*. Hamden, Connecticut, Shoe String Press, 1964 (repr. from the 1939 original ed.) p. 105.
- 36) Weyhrach, Ernest E. "Automation in the reserved books room," *Library Journal*, vol. 89, no. 11, June 1, 1964, p. 2294-2296.
- 37) Munthe, *op. cit.*, p. 105-106.
- 38) *Ibid.*, p. 106.
- 39) *Loc. cit.*
- 40) 「東京帝国大学図書館復興報告第三」〔同館〕1926. 2, p. 1-2.
- 41) 「昭和三年十二月新築竣工東京帝国大学附属図書館」〔同館〕〔1928. 12.〕12 p.
- 42) 「東京帝国大学附属図書館規則」<「東京帝国大学附属図書館利用案内」>〔同館〕〔1928. 12.〕p. 28-33.
- 43) 「東京帝国大学附属図書館規則」1935. 1, p. 5.
- 44) 「東京帝国大学附属大学附属図書館利用案内」〔同館〕〔1928. 12.〕p. 8-9.
- 45) 姉崎正治「年改まるに際して祝詞を申上げると共に図書館近状の御報」1930. 1, p. 8.



- 46) 東京帝国大学 附属図書館 利用案内」〔同館〕1939. 3, p. 7-8.
- 47) 京都大学 附属図書館「京都大学 附属図書館六十年史」同館, 1961. 3, p. 31.
- 48) *Ibid.*, p. 33.
- 49) *Ibid.*, p. 34.
- 50) *Ibid.*, p. 159.
- 51) *Loc. cit.*
- 52) 永峯光名「復興した 東帝大図書館について」図書館雑誌, no. 112, 1929. 3, p. 94.
- 53) 文部省大学学術局「国立大学 図書館 改善要項及びその解説」1953. 1, p. 4.
- 54) *Ibid.*, p. 18.
- 55) 私立大学図書館協会「私立大学 図書館改善要項」1956. 5, p. 26.
- 56) *Ibid.*, p. 31.
- 57) 文部省大学学術局「指定図書実施要項」1968. 3, p. 1.
- 58) *Ibid.*, p. 2.
- 59) *Ibid.*, p. 3-4.
- 60) 榊井知子「大学図書館における リザーヴ・ブック制度」*Library Science*, no. 1, 1963. 7, p. 157.
- 61) 団野弘文「大学図書館における 指定図書制度について」神奈川県図書館学会誌, no. 16, 1963. 11, p. 18-19.
- 62) 文部省大学学術局情報図書館課「昭和42年度大学図書館実態調査結果報告」同課, 1969. 3, p. 23.
- 63) *Ibid.*, p. 61 のデータより。
- 64) *Ibid.*, p. 68.
- 65) 青野伊豫児「国際キリスト教大学 図書館にみる指定図書制度」図書館雑誌, vol. 53, no. 7, 1957. 7, p. 224-225.
- 66) 近川澄子「大学 図書館におけるリザーヴ・ブック制度の諸問題」〈私学研修福祉会, 日本私立大学連盟「第五回図書館研究集会報告書」1961〉p. 228-237.
- 67) 榊井, *op. cit.*, p. 158-159.
- 68) 近川澄子「クラスと直結した指定図書——国際基督教大学 図書館の場合」丸善ライブラリーニュース, no. 56, 1967. 5-6, p. 456.
- 69) ———「基督教大学 図書館における 指定図書制度」図書館雑誌, vol. 64, no. 5, 1970. 7, p. 200-202.
- 70) 岸本英夫「東京大学 附属図書館近代化のめざすもの」図書館雑誌, vol. 57, no. 2, 1963. 2, p. 49. 53.
- 71) 黒住 武「指定図書漫筆——東京大学総会図書館の場合」丸善ライブラリーニュース, no. 56, 1967. 5-6, p. 455.
- 72) 山田映美「大学図書館における 指定図書制度——東京大学農学部図書館を中心として」1968. 12, p. 54 (慶応義塾大学図書館・情報学科 昭和43年度卒業論文)。
- 73) 「中央図書館における指定図書の現状と今後の課題」図書館情報, vol. 2, no. 2, 1966. 2, p. 7-10.
- 74) 辻 英雄「指定図書制度を実施して」東海地区大学図書館協議会誌, no. 11, 1966. 3, p. 10-11.
- 75) 「指定図書制度について(上); (中); (下)」図書通信, no. 10, 1965. 1, p. 38; no. 11, 1965. 2, p. 42; no. 12, 1965. 3, p. 46.
- 76) 「指定図書 発足の状況」図書通信, no. 17, 1965. 8, p. 66.
- 77) 田沢恭二「東京学芸大学図書館の指定図書制度について」図書館雑誌, vol. 64, no. 5, 1970. 7, p. 200-202.
- 78) 北島武彦「大学図書館の指定図書制度に関する一考察」東京学芸大学紀要, 第21集, 第1部門, 1970. 3, p. 103.
- 79) 沢田 健「指定図書制度の実施状況——電気通信大学図書館の場合」丸善ライブラリーニュース, no. 56, 1967. 5-6, p. 455.
- 80) 石川清治「学生の図書館利用学習——教授形態との関連において」図書館界, vol. 17, no. 2, 1965. 8, p. 34-45.
- 81) 前島重方「指定図書の運用について——国学院大学図書館の場合」丸善ライブラリーニュース, no. 56, 1967. 5-6, p. 456.
- 82) 辻, *op. cit.*, p. 11.
- 83) 「指定図書についてのアンケートを集計して」静脩, vol. 2, no. 3, 1965. 9, p. 2.
- 84) 新坂平次「指定図書の在り方」〈私学研究福祉会, 日本私立大学連盟「第四回図書館研究集会」1960〉p. 182-188.
- 85) 榊井, *op. cit.*, p. 160-162.
- 86) 団野, *op. cit.*, p. 18-21.
- 87) 北島武彦「指定図書制度について」学術月報, vol. 18, no. 12, 1966. 3, p. 696-698.
- 88) ———「指定図書制度について」丸善ライブラリーニュース, no. 56, 1967. 5-6, p. 453-454.
- 89) ———「指定図書とその運用について」厚生補導, no. 3, 1968. 11, p. 20-27.
- 90) ———「大学図書館の指定図書制度に関する一考察」*op. cit.*, p. 109-110.
- 91) 津田良成「指定書書架の配置と指定書閲覧室」丸善ライブラリーニュース, no. 56, 1967. 5-6, p. 457-458.
- 92) 青野, *op. cit.*, p. 224.
- 93) 榊井, *op. cit.*, p. 162.
- 94) 黒住, *op. cit.*, p. 455.
- 95) 田辺 広「指定図書制度の意義」薬学図書館, vol. 15, no. 1, 1970. 9 に掲載予定の原稿による。
- 96) 石川, *op. cit.*, p. 34-45.
- 97) McDiarmid, Jr. E. W. "Conditions affecting use of the college library," *Library Quarterly*, vol. 5, no. 1, Jan. 1935. p. 61-64, tab. 3, 4.
- 98) Branscomb, *op. cit.*, p. 44-51.
- 99) 田辺, *op. cit.*